

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 0 4 号

鵠沼の樹木について……………	小林 政夫…	1
公民館まつり		
「鵠沼と馬込文士村」……………	企画担当…	7
ウオンテッド・その後……………	企画担当…	11
今井達夫を紐解く……………	土岐 臣道…	14
鵠沼の歴史的家屋を訪ねて⑮		
葉山家住宅……………	佐藤 弘・岡田 哲明…	22
劉生研究		
二人の少女「麗子」「於松」と鵠沼を語る会		
……………有田 裕一・佐藤 和子…		26
劉生「鵠沼風景」の舞台検証……………	渡部 暁…	34
Coffee Break わたしの鵠沼……………	鈴木三男吉…	45
江見水蔭・片瀬の居住箇所はどこ？ ……	竹内 広弥…	47
首塚の碑再建 ……	渡部 暁…	51
今井達夫遺稿⑨		
家犬三代記……………	今井 達夫…	53
活動の記録（平成23年10月～24年3月） 総務担当 ……		69
編集後記 ……		72

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

鵠沼の樹木について

2011 年 10 月例会「お話」

小林 政夫(会員)

人の一生より長い年月を経て、今日に残る巨樹を見上げる時には、誰もが畏敬の念を抱くと思われる。ここから巨木信仰が生まれる。日本では、神木が多い。

環境庁の 1988 年の調査によると、全国の巨木約 6 万本のうち信仰対象になったものは約 22%で、幹周り 6 m 以上の木では約 40%が信仰対象で、その所有者は社寺が約 70%である。

今回は、藤沢市発行の「文化財総合調査報告書第 5 集」から鵠沼地区にある直径 30 cm 以上の樹木(巨木を含んで太い木と呼ぶことにした)の集計を行い、分かったことを報告する。

1. 鵠沼にある太い木(直径 30 cm 以上)の種類と地域分布 表 1

イ、鵠沼にある太い樹木の多い順位 1 位から 10 位までを調べた。

表 1 の順位の項 参照 クロマツ 1 位 ケヤキ 2 位

ロ、明治以降に渡来した樹木について

個人の宅地内で育つものが多い。ヒマラヤシダは湘南高校の並木として植えられたもの 35 本

2. 直径 30 cm 以上のクロマツとケヤキの分布図

砂丘地帯の代表植物クロマツと台地の代表(武蔵野)植物ケヤキの分布から見える鵠沼の表層土壌・住宅地の発展を両樹木の分布から考察した。

- クロマツ 藤沢市の木であるクロマツは、海浜部に多い。窒素が少なく、保水力の乏しい海浜部の砂地に対して強い適応力を持つ。
しかし、海岸線等への植樹が古くから行われ本来の植生や分布はよく分からなくなっている。植えられたものが多い。



木又地蔵

1. 高木和男氏「鵠沼海岸百年の歴史」 p 38～43

海岸の砂地の分譲価格は、いたって低廉であったが、マツを植えるという条件が付いていたという。

なにしろ当時は、松苗を植えて、砂止めをして、それを登記所へ申請すれば所有者として登記してもらえたというのである。

2. マツを植えた人「木又地蔵」

落合又五郎の遺徳を讃えた記念地蔵。

所在地 辻堂東海岸 2-13-44 図 1 ■印(左下)

※「木又地蔵建立の由来」

落合又五郎 俗称木又さん、この地の農夫。明治初年、

東海岸一帯の砂地開発に着目。松を植え、南瓜、甘藷等の植え付けを試み、村人に奨励し、収穫は土地移住者にも給与した。この事実を三上忠道氏(鉄道大臣)等が徳として称賛、大正 12 年以來、毎年 8 月 15 日地蔵祭を行っていた。

※ 落合又五郎

文政 11 年(1828) 辻堂に生まれる。明治 41 年没、81 歳。

性格は少し変わっていた。半農半漁の生活の中で、仕事の帰りに実生の松の木を探してきてはここと思う所に植えていった。嵐や強風で、それが一夜のうちに埋まり駄目になっても諦めず、同じことを繰り返した。

しまいには、本業の畑も漁も放り出し、松ばかり植えていた。とうとう村の人達にも、頭がおかしいと笑われる様になった。最後には「むこう山」に小屋を建て一生涯松を植えた。

○ケヤキ

日本を代表する落葉広葉樹。樹冠の美しさは随一。台地の上の木として武蔵野を代表する木。街路樹(並木) 屋敷林 防風林 木材として利用され、肥沃地によく育つ。真夏には、ケヤキに囲まれた屋敷内と外では 4～5 度の温度差あり。冬は、枯れ枝・落ち葉が良い燃料になった。

※自然状態の海浜地帯では、初めにマツが入り込み下草が増えて腐葉土になるとほかの樹木が侵入し、森を作るようになる。

3. クロマツとケヤキの分布図を作って気付いたこと

太い木だけを見たとこでは、現在の海岸線に平行して 1.5 km 付近にケヤキの分布南限がありそうだ。(大平橋一本真寺—湘南学園をつなぐ線)

1. この付近 2000 年前の海岸線らしい。これより南はケヤキが育ちにくいのか？
(海岸線の後退により、北部は人家や耕作地が増え、土壌が肥沃になったのか)
2. 鵠沼の集落の広がり江戸時代末には、この付近まであり、そこに住居する農家の人達が植えたケヤキか？ 南側は砂丘で現在新しい住宅地
(明治 15 年の迅速図では、鵠沼の集落の南部はこの付近まで広がっている)

海岸線に平行した 1.5 km 以内の細いクロマツ・ケヤキの分布調査が、必要になってきた。

(こばやし まさお)

10 月例会の「お話」の訂正 「巨樹・巨木」の定義について

巨樹・巨木 昭和 63 年(1988)環境庁の定義による

「地上から約 130 cm の位置で、幹周が 300 cm 以上で主幹が 200 cm 以上のものとする」

図1 直径 30cm 以上のクロマツとケヤキの分布図

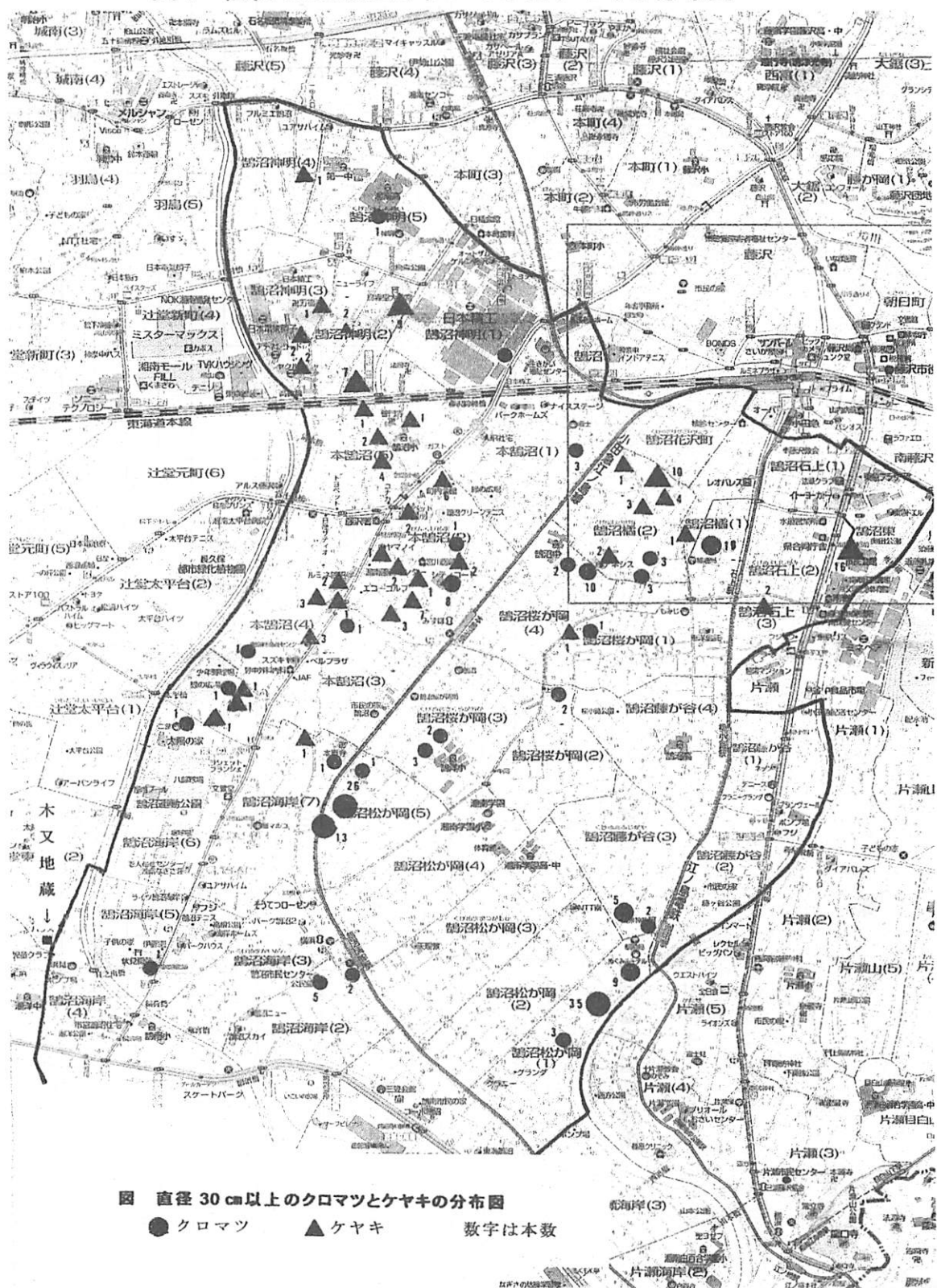


表 1 鵠沼の太さ 30 cm 以上の樹木の地区別集計表

使用した資料は、昭和 58 年(1983)～平成元年(1989)にわたり調査「藤沢市文化財総合調査報告書第 5 集 樹木」の鵠沼地区を利用し集計をした。調査時点からすでに 20 年以上過ぎた現在、状況の差異はかなり観られるものと思われるが、鵠沼地区にも多様な樹木が生育していることがわかった。

湘南砂丘地帯の東端にある鵠沼地区にクロマツが多いことは当然であるが、ケヤキ・タブノキ・クスノキ・スダジイも多い。

鵠沼地区の幹回り 1 m 以上の樹木

番号	地 区 樹木名	神 明 1～5	本鵠沼 1～5	花沢・橋 石上・	鵠沼海岸 1～7	桜が岡 1～4	藤が谷 1～4	松が岡 1～5	鵠沼	合計本数	多い順位 1～10 位
1	アオギリ	2			1					3	
2	アカガシ		1							1	
3	アカメガシワ		2							2	
4	イチョウ	14	8	5	4	4	2			37	7
5	イヌシデ	1								1	
6	イヌマキ	2	3							5	
7	ウメ	1								1	
8	エノキ	12	20	7	2	2	1			34	8
9	オオシマザクラ	1								1	
10	カキ	3	1							4	
11	カナリーヤシ		2							2	
12	カヤ	2	1							3	
13	カシワ	1	1							2	
14	カリン		1							1	
15	キリ	1							1	2	
16	クスノキ	15	20	4	3	11	1	4		58	4
17	クヌギ		2			1		1		4	

	樹 木 名	神 明	本鵠沼	花沢、橘	鵠沼海岸	桜が岡	藤が谷	松が岡	鵠沼	合計本数	順位
18	クロマツ	8	12	17	13	40	16	98		204	1
19	ケヤキ	27	48	32	6	1				114	2
20	コウヤマキ	1								1	
21	コナラ		1							1	
22	サンゴジュ		3							3	
23	ザクロ		3							3	
24	シダレヤナギ	5		2						7	
25	シロダモ		3							3	
26	シラカシ	1								1	
27	スダジイ	9	17	5	4	2	2	1		40	6
28	ソメイヨシノ	8	9	9	2	2	1	1		32	9
29	ダイオウショウ			1						1	
30	タブノキ	33	32	6	1		1	1		74	3
31	タイサンボク		1	1	1					3	
32	トチノキ			1						1	
33	トネリコ	1								1	
34	ナワシログミ		4							4	
35	ニッケイ			1						1	
36	ニセアカシヤ					3				3	
37	ネズコ			1						1	
38	ハリギリ	2								2	
39	ヒムロ				1					1	
40	ヒノキ		1	1						2	
41	ビヤクシン					2				2	
42	ヒヨクヒバ		1							1	
43	ヒマラヤシーダ	35				7	1	1		44	5

	樹木名	神明	本鵠沼	花沢・橋	鵠沼海岸	桜が岡	藤が谷	松が岡	鵠沼	合計本数	順位
44	フジ		1							1	
45	ポプラ			1						1	
46	マユミ		1							1	
47	マテバシイ					1				1	
48	ミズキ	3								3	
49	ムクノキ	22	3	4		1				30	10
50	メタセコイヤ	1								1	
51	モッコク		1							1	
52	モチノキ		13	1	1	1				16	
53	モミジバズカケ		4			5				9	
54	ヤナギ	1								1	
55	ヤブツバキ	2								2	
56	ヤブニッケイ	4	2							6	
57	ヤマモモ		1	1						2	
58	ユーカリ							1		1	

※明治以降に移入された樹木（番号太字）

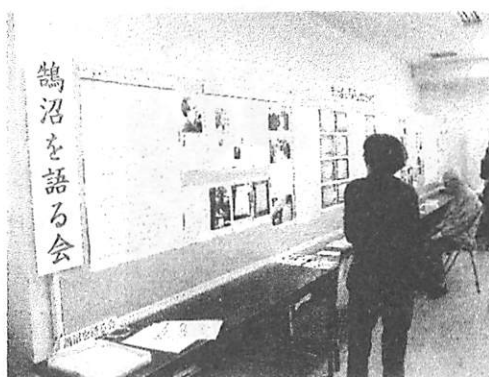
ヒマラヤシード ・ タイサンボク ・ ニセアカシヤ ・ モミジバズカケ ・ ユーカリ ・ ポプラ
 （明治初期） （明治初期） （明治初期） （明治初期） （明治初期） （明治初期）

カナリーヤシ ・ メタセコイヤ
 ? 昭和 24 年（1949）
 中国から種子・苗

『鵠沼と馬込文士村』

— 2011 公民館まつり —

2011 年 10 月 29-30 日開催の鵠沼地区
公民館まつりで、『鵠沼と馬込文士村』
をテーマに展示をした。



《作家・今井達夫が結んだ鵠沼と馬込》

鵠沼にゆかりのある作家のひとり、今井達夫は幼少より鵠沼で育った。その後、馬込に住んだが晩年は鵠沼に戻り、この地で生涯を閉じた。

「鵠沼を語る会」は今井クニ夫人から「今井達夫原稿・その他」を寄託されており、遺稿の中には「馬込文士村」に関するものがある。今井達夫は大正 13 年から昭和 17 年までの約 20 年間、東京・大田区の馬込に住んでおり、「馬込文士村」にもゆかりの深い作家である。今井の遺稿を調べてゆくと『馬込文学村二十年』（原稿用紙 365 枚）という大作と、もう一篇冒頭部分 16 枚が欠如した 338 枚の表題不明の原稿（内容からして『馬込文学村二十年』の別稿らしい）があった。

平成 3 年の産経新聞に「馬込文士村」が連載され、その中に今井達夫が書き上げたが出版されなかった『馬込文学村二十年』についての記述がある。今井の遺稿は印刷前のゲラ刷り校正までされた『馬込文学村二十年』の原稿ではなかろうか。そんな思いを抱いて馬込文士村を調べてゆくうちに、鵠沼と馬込の双方に住んだ文士たちが多いことを知り、昨年 6 月に会員十数名で馬込文士村を訪れた。

＊

当会は今井達夫の原稿のなかで未発表の作品を活字化して、会誌『鵠沼』に掲載している。寄託された「今井達夫原稿・その他」を恒久的に保存管理しなければならないという思いから、できればゆかりのある鵠沼で、さもなければ藤沢市でしかるべき保存場所と管理体制が確保できれば、そこに移管しようと考えてきた。しかし残念ながら当市は博物館、文学館などといった施設を持っていない。

このような事情からこれまで活字化の済んだ原稿の多くは神奈川県立近代文学館に寄贈してきたが今井達夫は約 20 年間馬込に住んでおり、「馬込文士村」にもゆかりの深い作家である。そこで『馬込文学村二十年』の原稿類など、馬込文士



郷土博物館に原稿類を寄贈

村に関するものは馬込にある大田区立郷土博物館に寄贈し保存管理していただくのが最善と考えてきた。昨年6月に「馬込文士村」を訪れ、この感を一層強くした。

10月18日、鵠沼を語る会から有田会長他、数名が同博物館に出向き『馬込文学村二十年』の原稿類を寄贈した。同博物館には馬込に住んだ文士たちの常設展示場が設けられており、今井達夫コーナーが新設されたときには今回の原稿類が展示され併せて研究材料として活用されることが期待される。(本年4月に常設展示場をリニューアルし、今井達夫を展示する予定とのこと)

《馬込文士村とは》

文士村概要

大正末期から終戦前のおよそ20年間、現在の東京・大田区の南馬込・山王とその周辺の地域に多くの作家や芸術家たちが住んでいたことから、この一帯を馬込文士村と呼んでいる。尾崎士郎・宇野千代夫妻を中心に、後に名を残す若き文士たちや画家、彫刻家など一年未満の短期居住者も含めると、半径1キロ以内に100名を越す文人・芸術家が暮らしていた。1923(大正12)年の関東大震災の直後で、東京周辺部の人口が急激に増加し、被害のほとんどなかった馬込などが田園地帯から住宅地へと次第に姿を変えはじめた頃であった。

馬込やその周辺地域に多くの文士や芸術家たちが集まったのは家賃が安く住みやすかった、仲間とつるんで暮らしたかったことなどいろいろあるが、尾崎士郎が震災前に馬込で暮らすようになり、飲むたびに「馬込はいい所だぞ」と言っては仲間を誘ったことが、大きく影響しているようだ。



馬込文士村住人のレリーフ

当時の馬込は人家も少なく、平地と違った上り下りの多い坂道は春秋の季節の変化に加えて縦の変化をもたらし、文士たちの散策を一層楽しいものにした。

一方、鵠沼はどうであったのか。明治末に江ノ電が開通し別荘地として急速に発展するが、まだまだ田舎で大正半ばに鵠沼に逗留した島田清次郎は、その頃の様子を次のように詠んでいる。

鵠沼は淋しい海辺松風と 波の音ばかり訪ふ人もなし

明治末から大正にかけて広津柳浪、江見水蔭など硯友社の面々が旅館・東屋に集まり、さらには斎藤緑雨、谷崎潤一郎、志賀直哉、武者小路実篤、徳富蘆花、与謝野鉄幹・与謝野晶子、岸田劉生、芥川龍之介といった、明治から昭和の文人墨客が東屋を中心に寓居・逗留し、執筆活動をした。

また大正はじめに高瀬家の離れに住んだ和辻哲郎、阿部次郎、安倍能成らが、新しい自由な文化を鵠沼から発信した。彼らがいずれも20代から30代前半の青年であったこと、貸別荘などの貸家に住んだことが特色である。

文士たちの交流

慶応の学生だった今井達夫が同人誌「橡(つるばみ)」を抱え、学生仲間とはじめて新婚の尾崎家を訪ねる。黒髪を束ねた新進の女流作家宇野千代が、黒緋子の衿をつけた派手な色彩の半纏をはおり笑顔で出迎える。士郎は文学を志す初対面の学生たちをビールで歓待し時間の経つのも忘れて文学論に興じた。尾崎士郎の欠点は「人に愛され過ぎること」と千代は述懐しているが、士郎のこの魅力が文士村を形成する核でもあった。

やがて、文士たちは萩原朔太郎や、衣巻省三の家でダンスに興じ、室生犀星も時折り顔を出していたようだ。一方、広津和郎の家ではマージャンの集まりがあり、覚えたての千代も国木田虎雄や間宮茂輔らと共に雀卓を囲んだ。そんなある日、宇野千代の断髪からモガ旋風が馬込に立ち昇り、川端康成や朔太郎の夫人たちに広がってゆき、馬込の空気は揺らぎはじめる。一家の破局、離婚問題などに飛び火し、笑いに満ちた文士村にも一時暗く冷たい風が吹き荒れた。



ダンスに興ずる文士たち

その後の交友の柱となるのは、大森相撲協会の設立(昭和7年)。尾崎士郎、山本周五郎、吉田甲子太郎、今井達夫、中村武羅夫、藤浦洸、鈴木彦次郎等々、土俵の上での裸の付き合いが始まる。

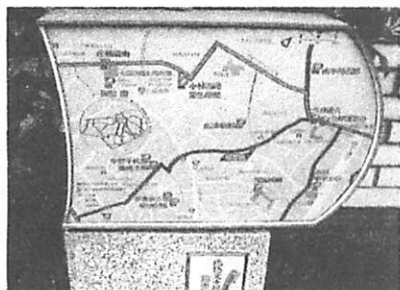
尾崎士郎は小説『空想部落』に当時のことを牛追村の出来事として物語にまとめ、昭和14年に映画化された。全編ほぼ酒と議論の場面であふれ、当時の文士村の姿を今に伝えている。文士村に通奏低音のごとく流れていたのは酒であり、文学論を戦わす仲間との暮らしであった。

このように馬込文士村の文士たちは互いの家を行き来して、家族ぐるみの深い交流を持ちながら日々、楽しく暮らしていたのである。

一方、鵠沼の文士たちは病氣療養で旅館・東屋や貸別荘に逗留しているものが多く、馬込のように家族ぐるみの付き合いはなかったようである。

《馬込にみる文士住居跡解説板》

馬込文士村を散策して驚かされたことは、散策コースに本とペン、原稿用紙のます目などをデザインした案内板や解説板がしっかり設置されていることである。



文学散策の最後に立ち寄った大田区立郷土博物館で、これら案内板設置などの経緯などについて訊ねた。総合案内板4箇所と文士住居跡解説板32箇所が設置されており、多くは周辺に住む人のプライバシーを尊重し近隣の公園や公共施設に設置されている、とのことである。

文学的デザインの案内板

昭和58年度の大田区長期計画のひとつ、文化や歴史の魅力をネットワークするテーマ別散策路整備のプランに「馬込文士村コース」が含まれていた。「馬込文士村連絡会議」が立ち上げられ、従来の縦割り行政に囚われない組織でスタート。「馬込文士村の作家たち」の作品を調べ、拠点とルートに関して文士の居住地跡、文化財、道路、公園などについての調査も進んだ。昭和63年「馬込文士村コースの整備」懇談会が開催され、コース設定、案内板や解説板のデザインなど具体的な整備計画が策定され、数々の記念館、公園も作られた。

鵠沼にもかつて数多くの文人たちが逗留、居住していた。「文人が逗留した東屋の跡」の立派な碑があるが、馬込にみるような文学的な案内板はない。

せめて、この辺りにこのような文化人が住んでいた、ということが分かる案内板があれば、鵠沼に対する人々の思いも一層深まるのではないだろうか。

(文責：企画担当・竹内 広弥)

《馬込文学村とは》《馬込にみる文士住居跡解説板》は一部、第103号と内容が重複。

*坂の街・個性の村―「馬込文士村訪問記」*鵠沼と馬込 双方に関わりのある文士、も展示されたが、第103号で掲載済みのため割愛。

ウオンテッド・その後

企画担当

昨年の公民館まつり『鶴沼と馬込文士村』の展示で“WANTED 尋ね人”

「鶴沼出身で馬込で三正屋という酒店を営んでいた人」を知りませんか？

という内容のポスターを掲示した。

今井達夫の遺品原稿のなかに三正屋の主人が鶴沼出身であることを記した取材メモと思われる「原稿用紙 2 枚」が見付かったからである。それには

- * 幼年時代 明治 41 (1908) 年 2 月 2 日出生
 7 カ月後父死亡
 姉、長兄、次兄、4 人兄弟 (4 行あき)
- * 少年時代 大正 4 (1915) 年 4 月、鶴沼小学校入学
 大正 12 (1923) 年、関東大震災 高等科卒業
- * 大正 13 (1924) 年 第 1 次奉公時代
- * 大正 2 年 甲府第 2 連隊入営
- * 昭和 2 年 第 2 次奉公時代
- * 昭和 5 (1930) 年 9 月、大森馬込に三正酒店開業
- * 昭和 6 (1931) 年、結婚 (2 行あき)
- * ブクちゃん
- * 小学校 下級生たちを 2 キロの道を引率して行く
- * 甲府連隊入営中、鶴沼の母に茶を送る。(1 行あき)
- * 高等科卒業後約 1 年間の鶴沼生活 (1 行あき)
- * 震災の時のこと (1 行あき)
- * 鶴沼堀川の生家から分家した父のこと (1 行あき)
- * 東屋の用事をする母、片瀬の芸者の送り迎え 7 銭
- * 片瀬柏屋のまんじゅうを別荘に売り歩く (1 行あき)
- * 木下家 (2 行あき)
- * 母との心情交流

という内容が書かれていた。

長く馬込に住んだ山本周五郎のエッセイ (完本山本周五郎全エッセイ) に

「何より溜まるのは酒屋の勘定であつた。今考えても、酒屋の勘定以外には苦勞したことがないような気さえするくらいで、大晦日になつてもとうてい払いきれものではない。まだうまい言訳も出来ない口でへどもど陳謝すると、三河屋のおやじも一瞬まずい顔をみせる。商法の駆け引きではなく、実際におやじのほうでもまずい事情だったのだろう。しかしすぐにこやかになつて、正月は酒をどのくらい届けたらいいかと訊くのである。(中略)

私でさえ 15 円位の勘定が溜まっていた。かの侍大将(註:尾崎士郎)の金額も侍大将その人から聞いた記憶がある。そのほかにどれほど溜められていたかはわからないが、これらの債権を自分の背中ひとつにぜんぶ背負つて或る夜ひそかに、三河屋のおやじは夜逃げをしてしまったのである。

三河屋のおやじよ、健在なら居どころを知らせて下さい。と私はいま年末の黄昏に心から願うのである。どうかあの時の勘定を払わせて下さい。」という一文がある。また、三正屋の話は山本周五郎の「夜明けの辻」の中の荒涼の記にも出てくる。

周五郎の住んだ路地には他に画家、書道教授、出版業者の三軒の家があり、彼らが自分に負けない貧しい様子を描き、

「晩秋の夜、朔風ふきすさぶ中に、たれかしきりと書道教授の家の表戸を叩いている。「今晚は某さん、——今晚は。」「——三正屋ですわ。」自分の傍らで縫い物をしていた女房が呟く。(中略) するといつしか三正屋の叩いているのは自分の家だという錯覚を起し、思わず両手の指を耳の穴へ押し込んでしまう。こんなことをするたびにどんなに自分の氣はへってゆくことであろう。」とつづく。

貧乏文士ばかりが住んでいた馬込で、ツケの回収が出来ず、夜逃げをした気の毒な酒屋の話であり、そのモデルが三正屋ではないかということだったが、こういう奇つな酒屋さんがいたからこそ、彼らは後に大成出来たのだ。とすればぜひ、その鵠沼出身の酒屋さんを見付けたいというのが主旨であつた。

展示期間中は何ら手掛りは得られなかったが、その後、馬込文士村ガイドの会の方から三正屋は現存しているとの情報が入つた。

それで、2月24日、馬込文士村ガイドの会の方お二人と土岐会員に現地を案内していただき取材に行つて来たのである。我々のインタビューに答えて下さつたのは三正屋創業者の息子の夫人である渡辺智子さんで以下はその報告である。

現在、三正屋さんは「コンビニエンス・リカーズ・ショップ・サンショー」と近代的酒屋に衣替えして、商売をされている。



今までに店をたたんだ事はないとのことでしたから、周五郎のエッセイの「夜逃げの部分」は創作だったのかも知れない。いずれにしろ、三正屋さんをはじめ 3 軒あった酒屋がツケ買いの文士たちを支えたことは間違いないであろう。

では今井達夫のメモの順序に従って分かったことを列記してみる。

氏名：渡辺 正夫 明治 41 (1908) 年生まれ (申年)

長姉：氏名不詳、浅草柳橋の経師屋さんに嫁ぐ

長兄： 定吉 植木職

次兄： ヒロおじさん 職業？

大正 13 (1924) 年 正夫は嫁いだ長姉をたよって上京し、酒屋の小僧になる

昭和 3 (1928) 年 徴兵検査、当時高座郡出身は甲府歩兵第 49 連隊に所属

昭和 5 (1930) 年、除隊。9 月、母とともに南馬込 1-18-4 で三正酒店を開業

昭和 6 (1931) 年、旧姓 (羽多野) 千代子 (豊橋の出身) と結婚

〃 年、南馬込 2-9-4 に店舗を移転 (前の店から 100m 弱の所)

現在、正夫さんも千代子さんも亡くなられた。お二人には娘 (綾子さん) と息子 (朝昭さん) があり、現在は朝昭さんと夫人の智子さんご一家でお店の切り盛りをされている。

智子さんは舅の正夫さんから、「子供の頃、母が苦勞して育ててくれた」という話をよく聞かされたという。が、今井のメモの内容については分からないということであった。また、朝昭さんの従兄弟には現在鶴沼在住の方もいるということであった。

(文責 岡田哲明)

今井達夫を紐解く

——「馬込文学村」は何故出版されなかったか——

土岐臣道（会員）

はじめに

今井達夫は「馬込文学村」という作品を書き上げていた。それを教えてくれたのは谷口英久記者が産経新聞に連載した「馬込文士村」であった。谷口のその記事を読むと、「馬込文学村」は出版されずに、今井クニ夫人の手元にあるという。

なぜ出版されなかったか、同時期に執筆中の榊山潤の「馬込文士村」に先を越されたからか。榊山は昭和のはじめに馬込に住んだ文士仲間の一人で当時時事新報の編集者だった。

谷口英久の記事からは今井の無念さが直に伝わって来た。読みたいと思う気持ちはもちろんのこと、この原稿になんとか日の目を当てられないものかと思った。

馬込に住んだ文士自身が馬込のことを書いたものは、尾崎士郎を始め、宇野千代、広津和郎、間宮茂輔、山本周五郎、それに榊山潤等々。尾崎には映画化された「空想部落」があり、実在の文士達をモデルにして、その暮らし振りを描いている。文士村の雰囲気をつかむには有用な作品であるが、抽象的な物語に仕立てであるので、具体的な情報は少ない。他の文士のものは榊山潤を除くと、中身の濃い情報をそれぞれ伝えてはいるが、エッセイ風な短編が多く、欲張りな文士村ファンにとっては物足りない。榊山潤の「馬込文士村」はそれゆえに貴重な一冊となっている。さらに加えて、今井達夫の「馬込文学村」が世に出ていれば…、いやなんとしても出ていてほしかったと思う。

今井達夫は明治 37 年横浜で生まれ鶴沼で育った。関東大震災のあと鶴沼から馬込へ移り住んだ。青年時代を馬込で過ごし、戦時中の昭和 17 年 39 歳のときに鶴沼にもどる。53 年鶴沼松が岡の自宅にて死去。享年 74 歳。墓所は藤沢遊行寺の塔頭眞徳寺にある。

地元鶴沼での今井達夫を紹介するパンフレットには、——震災の翌年大正 13 年大森馬込文学村に借家を見つけ住み始め、——とある。監修年月は 62 年 3 月、「鶴沼を語る会」の先達が今井達夫を紹介するのに、馬込文学村という言葉を使っている。今井を紹介するのに「馬込文学村」この言葉以上に相応しい表現はない。大森界隈の文士達が暮らしたエリアは通常「馬込文士村」と呼ばれているが、これは榊山潤の「馬込文士村」が出版された昭和 45 年以降に定着した呼び名で

あり、もし、今井達夫の「馬込文学村」が同時期に出版されていたら、かの地を「馬込文学村」と人々は呼んでいたかも知れない。

今井達夫の書評

出版されなかった今井達夫の原稿が存在することを、公にしたのは谷口英久であるとは既にも書いた。今井がある新聞に榊山の著した「馬込文士村」の書評を書く。それは昭和45年の12月のことだった。この書評を確認しようと横浜の新聞会館や国会図書館のデータベースをチェックしたが見当たらなかった。この書評には自分も「馬込文学村」を既にも書き上げていて、近く発売される予定だと書く。

この書評を書き残してくれたお陰で、幻の「馬込文学村」の存在が後につながっていく。僕の知る限りでは、今井の「馬込文学村」の存在を明文化しているのは谷口英久のみではなかろうか。他には46年5月に「大田文学地図」の著者染谷孝哉が同書の中で今井達夫が書いた馬込のことを「馬込文学史」として触れている。

谷口英久の「馬込文士村」の連載は平成3年1月7日から7月13日まで51回に亘り産経新聞に掲載された。その38、39回が今井達夫の「馬込文学村」についての記事であり、今井の書評の主な内容は38回に記述されている。

今井は榊山の「馬込文士村」を懐旧の情にたえないと称えながらも、自分の方が長く馬込に住み、榊山の去ったあとの馬込についても「馬込文学村」には書いてあるぞと自信の程を示す。榊山の「馬込文士村」発売後も今井は出版する意欲を失ってはいない。

なぜ出版されなかったか・・・谷口英久のあとを追う

谷口は鶴沼ヘクニ夫人を訪ね、「馬込文学村」のゲラ刷り原稿を見せてもらう。

原稿の上部には、S45.10.31日付けの要三校の朱印が押されていて、すぐにでも出版できる状態にあることを確認している。当時28歳の若きライター谷口は後年語っている。「今井ほどの作家でもこういう（出版間際に断念する）ことがあるのですね」と…。

なぜ？と思っている谷口の前にクニさんは奥の部屋から一枚のハガキを持ってきて見せてくれた。榊山から今井に宛てた当時のハガキである。——お手紙いただき返事も差し上げず失礼いたしました。実は小生も馬込を書き、やっと校正が終わったところです。今月中に出る由ですが大兄のも出てにぎやかになってお互いに売れるかもしれませんね。——ハガキを見て啞然とする今井の姿が浮かぶ。

この場面を想像してみよう。まず今井が榊山にハガキを書く、かなりの時間の経過後、——返事も差し上げず失礼——と榊山から返信ハガキが来る。榊山が実

は小生も馬込を書き…ということは今井が出したハガキには、今井が馬込を執筆していることが書いてあり、それを目にした榊山が「これはいかん」と以前から構想を練っていた「馬込文士村」に着手し、校正の終わった段階で今井に返信のハガキを書いた、と僕には思えるのだが考えすぎだろうか。今井はこのハガキを受け取るまで榊山が同じ「馬込文士村」の本を出すことを知らなかったのではないかと谷口は書く。

今井の「馬込文学村二十年」(後述)にこういう文章がある。——榊山潤がどうということからバアをやることになったか僕は知らない、それは彼は彼の「馬込」を書くといっているからまかせることにする…とある。さらに、榊山の「馬込文士村」のあとがきにはこうある。——あの雰囲気のをせめて一部でも書き残しておきたいと思い、幾度も手をつけたがうまくいかなかった。今度また思い立ってぼつぼつ書いているうちに四百枚になった。——と、文士村の文士達はみな機会があれば馬込を書こうと思っていたようだ。しかし谷口の言うように榊山が、まさか同時期に馬込を書いていたとは今井も知らなかったであろう。

ここで二人の原稿を書き上げた時期について纏めておこう。

- 要三校の赤字印のある今井達夫のゲラ刷り原稿上部の日付が、S 45.10.31 日
- 榊山潤の「馬込文士村」のあとがきの日付がS 45.10 月末日

二人の立場と考え方の違い

「大兄のも出てにぎやかになってお互いに売れるかも知れませんね」とハガキに書く榊山と「一緒に出しても売れないだろう」という今井。後から追いかけて追い越した榊山と、友でもある先輩に出し抜かれた今井の心理的な面、馬込で出会った頃は出版社の社員と文学を志す学生の関係で年齢的には4歳違い、時事新報社では先輩後輩の間柄である。上下の差の感覚は現在とは違って、今井には遠慮もあったのだろうか。本の内容が馬込という狭い限られた地域の出来事を書いたものであり、一般的でないという面もあった。後年といっても平成3年のことだが、産経新聞に「馬込文士村」を連載した谷口英久記者は、「僕の書いたものも本になりませんでした。地域性が強すぎて売れないだろうという出版社の見解でした。」と21年前を振り返って、筆者宛の返信メールに書き込んでいる。

二人の性格の違いを、同じ文士村に暮した山本周五郎を通して見てみたい。まずは榊山から…。周五郎のけんか話は幾らでもあるが、榊山潤と山本周五郎が起こした諍いを両者の文献から見ると、「——京橋八丁堀のアパートの持主は酒問屋で一階に店を出している、酒はうまいからついであつたらこないか」と私

は云った。すると山本氏は「そんなお世辞は言わない方がいい、ほんとうに寄ったら迷惑に思うだろう」という。私はめんくらってやっきになって「俺はお世辞に云ってるんじゃない、うまい酒だからせめてコップ一杯冷ででも味わってもらおうと思ったのだ、といったのだがそれがもとで物別れになってしまった、へんな野郎だ」と書いている。

これにたいして周五郎はこう書く…、そのとき榊山はポケットから手帳を出して聞いた。「ところで山本君きみの住所は何番地ですか。」「おれは教えない」と答えた。売れない文士に対して編集者が住所を問うというのは、そのうちいつか原稿を依頼するかもしれないぞという優越感を示すもつとも卑劣な態度なんだ。

なんだこんな奴と思ったからおれは「君んどこへは絶対書かない。なんなら外へ出ろ」と云った。——というのが残っている。以後、周五郎は榊山とは口も聞かなかったようだ。

次に今井と周五郎の関係を見てみよう。はじめての出会いの場所は、銀座四丁目尾張町交差点の和光前。周五郎は当時博文館で編集に携わっていた井口長次(筆名は山手喜一郎)に編集者を紹介して欲しいと頼む。井口は編集を担当していた今井に「もしよかったら会ってやってくれないか」と声をかける。お願いしたのは周五郎の方で、その周五郎に今井が呼び出され、わざわざ銀座へ出かけなければならないという今井にとっては、ちょっと首をかしげるような初対面であった。

周五郎のまずは一杯から始まる初対面の人物テストに今井は合格し、二人は意気投合して深夜までの酒となる。山本周五郎にとって今井は数少ない生涯の友となった。つまり周五郎から見た今井と榊山は両極端であった。周五郎には「曲軒」という尾崎士郎が付けた仇名がある。偏見もあるが独特の眼力を持つ、人を見る目は鋭い。

今井は「自分は人間を書く小説家だ」と自負するように人間好きである。情の今井と、合理的な榊山の性格の差が、同時出版に対する考え方の違いにも現れているような気がする。

出版されなかった二つの理由

谷口はクニ夫人の次に平松幹夫を訪ねる。平松は今井の慶応時代の同級生だが今井の下妹松子と結婚する。つまり義弟でもあるのだ。平松から谷口はふたつの事実を聞く。ひとつは、川端康成に頼んだはずの約束の序文が書かれていなかったこと。ふたつには、不幸にも今井は脳溢血で倒れ入院、再起するが右手で字を書くことが出来なくなっていた。「馬込文学村」は左手で書いた原稿だと平松は

言う。

原稿を書き終わった今井が、川端に依頼した序文をもらいに行くと、「そんなものは書いていない」といわれ、怒って帰ってきたという。頭を下げてまで序文を書いてもらうつもりはなかった。もともと川端に序文を書いてもらおうと進めたのは平松だという。今井はそれほど川端の序文にこだわってはいなかったのではないかと思うが、序文の行き違いは出版の時期を狂わせる。

「馬込文学村」の原稿について

今井達夫の「馬込文学村」の原稿は3種ある。ひとつは「馬込文学村二十年」で、これを仮に①としよう。ふたつ目の原稿は①にくらべて[序に代えて]の部分がない。[序に代えて]の部分が紛失したのか、あるいは、はじめから[序に代えて]は共用しようと、一つしか書かれていなかったのか分らないが、本文はほぼ同じ内容であり、この原稿には第三者（出版社）の手にわたったと思わせる句読点チェックの鉛筆が入っている。この原稿を②としよう。三つ目の原稿は谷口英久がクニさんから見せられたという要三校の朱印の押されたゲラ刷り原稿である。この原稿は現在行方不明であるが、これを③としよう。その他には、「もうひとつのあとがき」が残る。これは左手で書いたもので、要三校のゲラ刷りの状態になっている。（当会がクニ夫人から預かった未発表原稿のなかに①と②があった）

S43年の暮れも押し詰まって今井は脳溢血で倒れる。ひと月ほどして意識を回復すると間もなく、今井は主治医に言う、「一生歩けなくても結構ですから、右手で字が書けるようにしてください」と。主治医から「医者というものは、体全体を直すのが仕事ですよ」と優しくたしなめられる場面が「もうひとつのあとがき」に書かれている。翌S44年は1月から8月末まで長い闘病生活を送らねばならなかった。入院して3ヶ月を過ぎた頃、戸塚の国立病院から、伊豆のリハビリ施設のある慶応大学病院系の温泉病院に移り、左手で書く練習を始める。左手で友人の鳥海夫妻にハガキを書き、返事がくる。左手で書いた文字が相手に通じたことを今井は喜ぶ。さらに「もうひとつのあとがき」に今井は書く、「馬込文学村」を書き出したのはS44.10.1日であったと。既に①と②の2種類の「馬込文学村」が44年以前に完成しているというのに、まるで「馬込文学村」を初めて書くような表現だ。ここで言っている書き出しの期日は左手で書いた第3の「馬込文学村」のことを言っているのだろうが、なんとなく不自然に僕には感じられる。左手でトレーニングを積んだ後の、S45年以降に左手で書いた馬込以外の原稿が10数種類残っているが、もっとも長いものでも400字詰め原稿用紙43枚、あと

は30枚、20枚以下のものが多く、「馬込文学村」は①、②の原稿から推測しても360〜70枚位の作品になる。それも回復後の早い時期、つまり左手で書き始めた訓練の浅い時期に、今井の原稿の中で最長の「水上瀧太郎」(677枚・右手)に次ぐものを、左手で書けるものだろうか。左手の「馬込文学村」は完成まで1年と54日の期日を要した。「もうひとつのあとがき」は原稿用紙31枚分の長さで、これを含めると400字詰め原稿用紙で約400枚の作品となる。平均して1日に1枚のペースで14ヶ月弱書き続けねばならない。今井は「もうひとつのあとがき」に、時間がかかるのに溜息をつかなければならなかった。また、その作業がひどく疲れて長時間続かないせいもあったと書いている。

ひょっとすると、今井が実際左手で書いたというのは本文ではなく「もうひとつのあとがき」のことではないかと、僕は考えた。本文は②の原稿を採用し、「もうひとつのあとがき」を加えて出版社に提出し、③の谷口の目にしたゲラ刷りの原稿となったと考えられないだろうか。「もうひとつのあとがき」は時間の経過と共に登場人物に物故者が出て、その変化を記さねばならなかったと書いている。

また、鶴沼を語る会に委託された遺稿集の中に、なぜ③の元となる左手で書いた原稿がなかったのか、クニさんはどの原稿よりも「馬込文学村」を大切にしていたと思える節がある。谷口がクニさんからゲラ刷りの原稿を見せてもらったとき「何とかならないかしら…」と言われたと谷口は述懐している。今井が書いた「馬込」ならどれも貴重なもので、その甲乙はない。がしかし、今井が出版を考えていた原稿が見当たらないというのは、僕にとっては如何にも残念である。

右手の原稿が書かれた時期は・・・

右手で書かれた①と②の原稿がいつ書かれたのか、今井が倒れるS43年の暮以前の動きを追ってみよう。S43年正月から10ヶ月かけて「水上瀧太郎」を執筆している。この本は12月25日に富士出版社より発売された。校了までの期間を含めると、おそらく43年は「水上瀧太郎」一本に費やされ、他の原稿を書く余裕はなかったと思われる。また、S41年に今井は山形新聞に4月1日から6月6日まで、67回の連載記事を執筆している。タイトルは「ハーグにささぐ・安達峰一郎とその周囲」。母きみの兄つまり伯父の峰一郎について書いたものだ。伯父はハーグ国際裁判長を務めた人である。

①の原稿には、長谷川脩二が亡くなった昭和39年12月のことに触れているから、それ以降に書かれたことになる。②には長谷川のことは出てこないが馬込同窓会のことが書かれているので、①と前後して書かれたものだろうと推測できる。

つまり①と②の原稿が書かれた可能性のある時期はS 40 年から 42 年の間で、「ハーグにささぐ」の掲載期間中の 41 年前半を除く期間と推測してはどうだろう。中でも 42 年ごろではないかと僕は思うのだが。

川端康成の序文はなぜ書かれなかったのだろうか？

さて次に、川端康成に序文を依頼した時期はいつごろだったのだろうか。これは僕の乱暴な推測だが、①もしくは②を執筆するときだとしたら、川端のノーベル賞受賞（S 43 年 10 月）前ということになる。受賞後川端は忙しくなり序文のことを忘れてしまった。しかし、実際には左手で書いた最新原稿①を以って出版を考えるのが普通であろうから、S 44 年 10 月以降 45 年ごろと考えるべきか。

左手で書く今井の姿を見た平松は、応援してやりたいと思った。ノーベル賞受賞後の川端に序文を書いてもらえば箔がつくと思い、今井を川端の所へ連れて行く。と書いてはみたが、果たしてこの時期の今井は外出することが可能だったのだろうか？ちょっと気になるところだ。

今井と川端とは馬込時代に近所に住んだ仲で多少の面識はあった。川端はS 3 年から 4 年にかけて馬込文士村の臼田坂に暮したことがある。ある晩、尾崎士郎の家でダンスの集まりがあった。宇野千代に頼まれた今井は川端夫人の秀子さんを、徒歩 5 分ぐらいの所だが、家まで送っていったことがある。家の前で川端は「どうも」とひと言挨拶したという。尾崎と川端は湯ヶ島からの付き合いで、文学的にお互いを認め合っていた。尾崎の誘いで川端は馬込にやって来た。秀子夫人と萩原朔太郎夫人の稲子さんは、宇野千代の影響で当時流行のモガの先端に行く。髪はショートカット、派手な洋装スタイルで当時の文士村を闊歩していた。

やがて尾崎と宇野千代、萩原家、榊山家、などの離婚劇が進展してゆく。「これはまずい」と生真面目な川端は考えたか、昭和 4 年 9 月上野は桜木町へ引っ越しで行った。ちょっと横道にそれたが、今井とはその程度の面識しかない。

一方、川端と平松の付き合いはおそらく戦後、日本ペンクラブの会長と理事との関係からだろうか。いずれにしても僕の云いたいことは、今井の性格から判断すると、本人は平松が思うほど川端のお墨付き的序文を、欲してはいなかったのではない。今井からの序文の依頼は、川端には社交辞令的なものにしか映らなかったのではなかろうか。

さらにもうひとつ考えられないだろうか。川端はS 47 年 4 月に逗子マリーナの自宅マンション仕事場で事故死する。当時自殺説も流れた。ノーベル賞受賞後、プレッシャーで書けなくなっていたと云う。受賞後の作品は未完となった「たん

ぽぽ」の他には、短編が数作品残るのみという。今井の序文など書ける状態ではなかったのではないか。

今井の「もうひとつのあとがき」の最終行には、「序文をくださった川端康成氏、力を貸してくださった諸氏に感謝を捧げるものである」と書かれている。日付はS45.11.24のもので、少なくともこの日まで、今井は川端が序文を書いてくれているものと信じている。このあと、川端を訪ね序文の事を切り出すと「そんなものは書いていない」といわれたのだろう。榊山に先を越されることが明白になったその時の今井の憤りと無念さが、伝わって来る。

それでもまだこの時点で今井は出版を断念してはいない。書評を書いたS45年12月までは、「表裏一体」の「文士村」と「文学村」であることをアピールしている。しかし、不幸な状況が重なり「文学村」は「文士村」に先を越されてしまった。「地域性が強すぎて売れないだろう」と出版社から平成3年ごろ谷口英久が言われたように、また馬込を書いたものは、「一緒に出しても売れないだろう」と今井が言うように出版社も判断したか。ついに出版されることはなかった。

おわりに

クニ夫人の手元にあった②の「馬込文学村」の原稿が谷口の見た③のゲラ刷りの元原稿かどうかはわからない。僕の希望的推測に過ぎない。例え③を左手で書いたとしても、①と②の原稿を見るかぎり、その内容に大きな差はないように思う。それでも③を諦めるわけにはいかない。今後の課題としよう。それにしても今井の幻の「馬込文学村」が42年間の長い眠りから覚めて、ようやく日の目を見ようとしている。今井達夫は馬込での文士仲間のなかでは最年少だったゆえに、ともすれば端役的存在として扱われがちであったが、文士村が文士村であるための、その交友の広さと深さはメンバーの中でも際立っており、今井を措いて文士村は語れない。今までの馬込に於ける今井達夫の評価はいかにも低すぎた。今井達夫が正当に評価される日の来ることを、願わずにいられない。

「馬込文学村二十年」の本文冒頭を紹介して、この話を終わろう。

昭和三年浅春のある夜ふけ、二階の書斎で机に向かっていると、隣家の向こうの四つ角あたりから、

「おうい、今井。」

と呼ぶ声がひびいて来た。榊山潤の声である。僕は立って、雨戸をあけた。

「おい、けちけちするな、くよくよするな。」

榊山は大きな声で叫びながら、歩み去って行った。

(とき しんどう)

葉山家住宅

佐藤 弘（会員）

岡田 哲明（会員）

2010 年秋、葉山家住宅が間もなく取り壊されるという情報が、浅野会員から当会に知らされた。建物が滅失するのは残念だが、その前にせめて間取り図と写真くらいは残しておかなくてはと取材に訪れることになった。

葉山家住宅とは、藤沢市議を経て藤沢市長 6 期、衆議院議員 2 期を歴任し、2004 年に 12 人目の藤沢市名誉市民に叙せられ 2010 年 3 月 13 日に 76 歳で亡くなった葉山峻の生家のことである。場所は藤沢市鶴沼海岸 6-2-5 である。

葉山家は代々堀川の地主で峻の祖父にあたる葉山又兵衛は勤勉で機会あるごとに土地を買い広げ、樹木林のある数千坪の敷地を擁する大地主になった。又兵衛は近所の人々にマタベさんと慕われていた。

この家を建てる時、マタベさんは、子孫に万一の事がある時のためにと屋根を銅板葺とし、道路から 100m も玉石垣を組み敷地内には無数の植樹をした。

金が入用な時は、銅板・玉石・植木を売ればよいという考えだったというのだ。

『鶴沼』75 号 若尾肇「葉山家の人々」参照

2010 年 12 月 8 日、峻の実弟である葉山水樹氏、実妹の浅野陽子氏のご手配下さり、峻氏夫人のご了解を得て解体直前のため荷物片付けでお取り込み中を、ご迷惑をも顧みず会員有志（浅野陽子、有田裕一、佐藤弘、竹内広弥、岡田哲明）で見学、写真撮影をさせて頂いた。その後、応接室（洋間）にて水樹氏に葉山家住宅についてご説明を受けた。

水樹氏のお話しでは、建設年代は昭和 2～3 年ころ、大勝（今も本鶴沼にある大勝株式会社）が建設した。関東大震災時の邸は 2 階建てで、現在地より西にあって倒壊こそ免れたが大きく捻じれ傾いた。又兵衛は現在地に 1m ほど盛土し工期は丸 3 年を要したという。

木造平屋建、総坪数は不明。というのは、図面を見て頂くと分かるとおおり、実線で表示した部分、つまり、玄関、式台の間、洋間、座敷、次の間、中の間、広

縁、客用便所などは建設当時のままであるが、いわゆる生活部分は昭和 27 年に大幅に改修建て替えがなされており、その部分は水樹氏の記憶を頼りに以前の間取りを復元し点線で示したが面積的には極めて曖昧である。

大屋根も銅板葺であったが、終戦直前(1945 年 7 月 30 日)、米軍艦載機の爆弾が庭に着弾し損傷したので瓦葺に改められたそうである。

関東大震災の時、瓦葺家屋に被害が大きかったことから、大正末から昭和にかけて関東では、トタン屋根、スレート屋根など軽い屋根材料が推奨された。

銅板が用いられたのは、塩害に強いからであったと思われるが、高価なため一般的ではない。神社仏閣ならともかく個人住宅で全銅板葺というのは異例である。マタベさんの遠大計画あってこそその選択であろう。

また、屋根面は上むくりのそりを持っており、入母屋作りで軒庇つき、銅板製鬼瓦も重厚で飾職人の技量がしのばれる。外壁は洋間部分はドイツ下見、その他は、鴨居まで縦羽目張り、そこから軒下までは漆喰塗である。

では中に入ってみよう。(※各和室の室名は便宜的に著者が名付けた)

玄関：内側から見ると玄関扉は式台の中央からずれている。北東の角が欠けているからである。この角は座敷から見て鬼門に当たるために欠いたのではないかと思われる。

式台の間：6 畳間の畳敷きで 3 尺幅の広い縁が一段低く付いていて、そこから洋間にもつながる。

広縁：広縁は幅 4 尺 5 寸、桧の縁甲板張り。左右の部屋の間を一直線に通る座敷に面して直角に折れて便所につながっている。庭に面した部分は杉の磨き丸太の一本ものの軒桁が通り、天井も折上げられて凝った作りである。

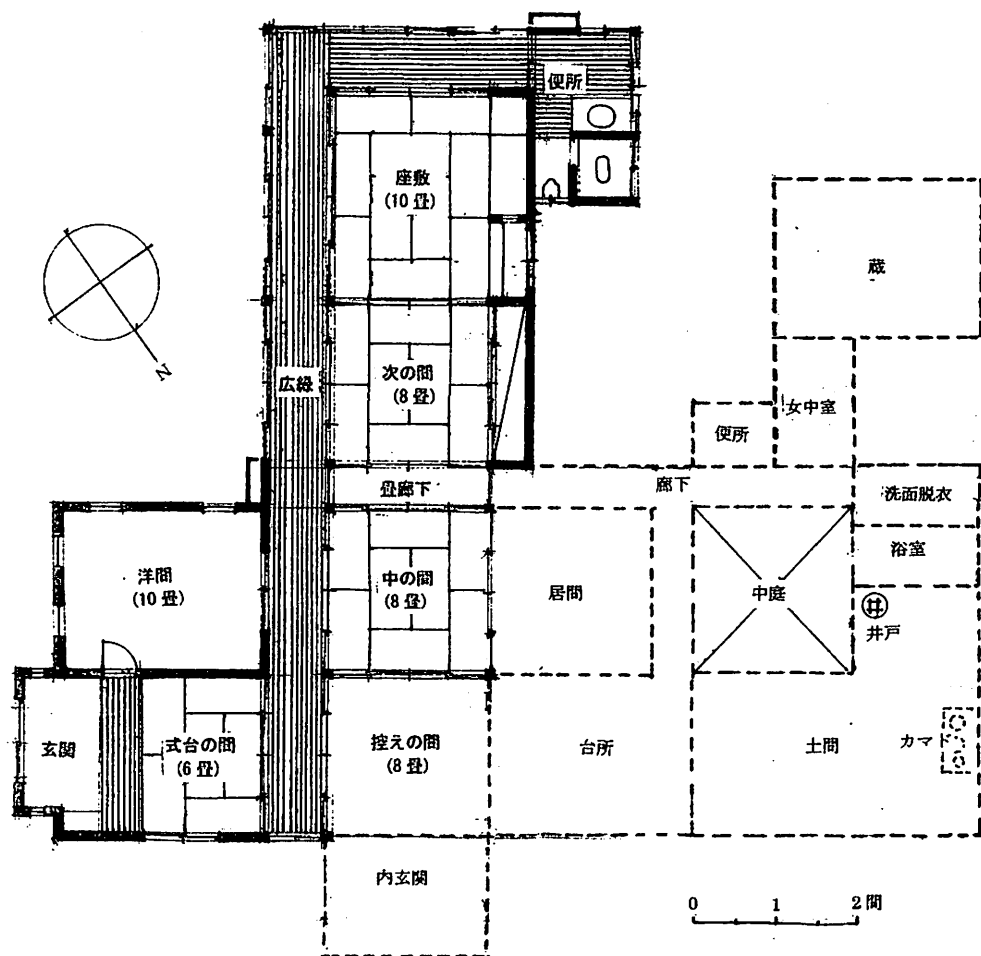
控えの間：本来は 8 畳の和室であったそうだが、見学时は床を板敷にし厨房に改装されていた。

中の間：8 畳敷き和室

次の間：間口 2 間の押入れ付き 8 畳和室

座敷：10 畳和室、床の間は 1.5 間、向かって左半間の琵琶床につづいて、1 間の板床、右の床脇は間口 1 間、違い棚はなく地袋の上は小窓になっている。次の間との境の欄間の透かし彫りもなかなか立派である。

洋間：和風住宅の玄関脇に応接間と称して洋間を 1 部屋配するのは、当時流行した形式。10 畳の広さ、床はラワン材（当時は高級床材）、壁は漆喰塗、天井は中央を折上げ高さ 3.45m である。4 つある窓は縦長の上げ下げ式ガラス窓。



葉山家住宅想定復元間取り図

次に、水樹氏の記憶をもとに復元した全体図を考察してみる。

まず目を引くのは座敷、次の間、中の間、控えの間の襖を払えば4室ぶち抜きの大広間になることである。それは内玄関からまっすぐに解放される。これは、あきらかに多数の外来客を意識した間取りであり、集落の議事や集会の会場として、まとめ役的、指導役的立場にある家が備えねばならない要素である。

一方、中の間、控えの間、居間、台所は「田の字」型で隣接した土間を持つこの間取りは、相模の農家の典型的なプランである。「集会場機能」「伝統的農家の間取り」それに前述した「玄関と隣接する洋間を持つ近代和風住宅」という三要素がミックスされた非常に興味深い事例である。



庭から…広縁・座敷・次の間の屋根
入母屋銅板葺きである。



玄関・洋間を望む
上むくりの屋根、手前は銅板、奥は瓦



広縁：天井・欄間も凝った造り
軒桁の磨き杉丸太も見事



左銅板屋根は玄関、右側本屋根は瓦葺
右端切妻だが入母屋であったのでは？



座敷：床の間と琵琶床、床柱は銘木角柱
壁は聚楽壁、天井は神代杉の杢板



洋間：漆喰壁天井ボーダーも漆喰塗
いかにも昭和初期の匂いがする
(さとう ひろし・おかだ てつあき)

二人の少女「麗子」「於松」と鵠沼を語る会

有田 裕一（会員）

佐藤 和子（会員）

オカッパ頭、赤っぱい着物を着てほほ笑みを浮かべた愛らしい少女像は、誰もが記憶にあると思います。岸田劉生の「麗子微笑」は教科書にも載っていました。その後も折にふれ目にし、いろいろな表情で描かれた少女像がかなりの数にのぼるのに気づき、それらの大多数のものが鵠沼で描かれた事も知ったのです。

画家、岸田劉生。その愛娘麗子、麗子と仲良しになった村娘於松、さらに大正期の鵠沼風景など今では鵠沼にとって大事な財産となっています。会誌『鵠沼』102号、103号には、「かわせみ学園講義録」として「岸田劉生と鵠沼」が掲載されていますが、ここでは登場する二人の少女、麗子と於松に焦点を当て、またお二人と当会との関わりについて述べようと思います。

なお、「於松」は劉生が画題として書いたもので、戸籍では片仮名で「マツ」になっています。よって本稿では以後、於松は「おマツさん」と、また麗子についても「麗子さん」と親しみをこめて表記することにします。

二人の再会

関東大震災（大正 12（1923）年 9 月 1 日）のあと、劉生一家は倒壊した松本陽松園の貸別荘を去り名古屋を経て京都へ、おマツさんも家族とともに鵠沼を離れました。時代は大正から昭和へと長い年月を経て、二人の少女はそれぞれの道を歩み、その間戦争を体験したりでお互いの消息はまったく途絶えてしまっていたのです。

昭和 36（1961）年 5 月のある日、おマツさんの娘さんが「これ、お母さんの顔！…」とご主人が手にしていた週刊誌の表紙をみて大声を上げました。それは『週刊朝日』5 月 12 日号で、鬘を結び、大きな瞳、ふっくらした頬、岸田劉生画「村娘坐像」だったのです。娘さんはそのことを知らせる投書をし、それは同誌 5 月 26 日号に掲載されました。

一方、麗子さんの友人が、たまたまこの記事を読み、同誌を振りかざしながら新宿の麗子さんの家へ駆け込んで来たといいます。

これまでも麗子さんはおマツさんの消息を尋ねて鵜沼まで行ったことがあるといいますが、歳月は鵜沼をすっかり変えてしまい、古くから住んでいる人に尋ねてもおマツさんに関する情報は得られなかったのです。探し求めていたおマツさんが、なんと鵜沼にほど近い藤沢市内に住んでいることが分かり、週刊朝日の肝煎りで昭和36年7月27日に藤沢駅頭で二人は再会しました。会った途端に「麗子ちゃん！」

「おマツちゃん！」

たがいに呼び合い、一瞬にして40年前の少女にタイムスリップしたようだったとおマツさんは今でもその日の感激を忘れられないそうです。

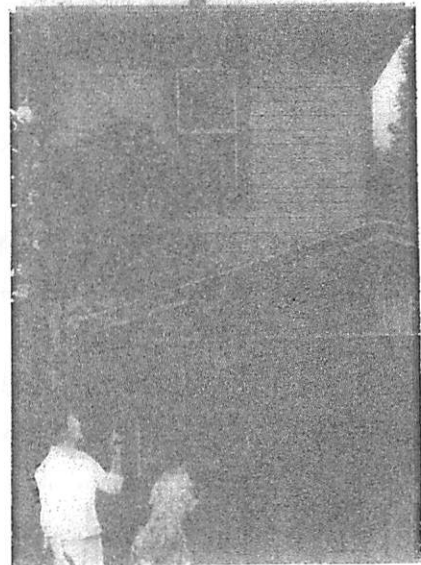


←

鵜沼を散策する
麗子さんとおマ
ツさん

→

アトリエだった
洋館を見上げて



二人はそれから思い出の鵜沼へ。そして競い合ってモデルをつとめた松本別荘跡一帯を散策し、残っていたノッポの洋館（劉生が画室にしていた建物、震災では倒壊を免れた）を見上げたりして旧交を温めました。その年の8月19～27日、東京銀座の松坂屋デパートでの『岸田劉生 33 周忌記念代表作展』には二人連れ立って出かけたそうです。このような思い出をおマツさんは昨日の事のように懐かしそうに話されるのでした。

これら一連の記事が週刊朝日9月15日号に掲載され、これまでの空白が一気に縮まり、さらなる再会を約した二人でしたが、翌年の夏、麗子さんに突然の死

が訪れますが後にふれます。

才能豊かな麗子さんは…

——こどもよ、美しくなれ、丈夫に育て——と願って愛に満ち溢れて育んできた劉生は、娘が学齢に達すると、鎌倉師範付属小学校に通わせました。鶴沼滞在中に、「麗子五歳之像」（大正 7 年 10 月・東京国立近代美術館蔵）から「麗子立像」（大正 12 年 4 月・神奈川県立近代美術館蔵）まで、次々と愛らしい、美しい、時にはエッと思わせる麗子像を描きつづけました。

鶴沼での震災遭遇後は、京都時代を経て大正 15（1926）年 2 月鎌倉長谷に転居し、麗子さんは鎌倉尋常小学校に転校します。翌、昭和 2（1927）年 4 月に鎌倉高等女学校（現：鎌倉女学院）に入学。2 年生の時書いた 2 篇の詩「春」「海」が校誌に載っていますが、のちにこの詩を読んだ酒井忠康（元神奈川県立美術館長）さんは「少々おませな少女の印象、父のところに来る多くの知識人を見て育ったためで、自然に薫染したと思う。心の形が素直に表されており文才豊かだった。」と評しています。

麗子さんは昭和 4（1929）年末、父劉生が没すると原因不明の発熱が長期間続き鎌倉高等女学校を退学します。昭和 6（1931）年には東京吉祥寺に転居。母、^{しづる}蔡さんは川上渭白流家元として茶道を教えて一家を支えます。2 年後、劉生亡き後、岸田家の後見役のような立場にあった武者小路実篤に「女優になりたい」旨を伝え、武者小路は「新しき村」の演劇部に入部させました。

「新しき村」は武者小路が理想社会の実現を目指して大正 7 年、九州宮崎県児湯郡木城村に建設した生活共同体で、昭和 8（1933）年当時、東京にも拠点として麹町区富士見町に演劇部があり部員は共同生活を送っていました。麗子さんはそこで部員たちと共同生活を始めます。19 歳のことです。昭和 12（1937）年、23 歳の時、一回りも年上の演劇部の仲間だった滝本貞次郎と結婚しました。滝本の郷里和歌山に移り歯科医院を開業、新しき村和歌山支部を作って活動します。一方、家庭では 2 女 1 男（文絵、夏子、生郎）をもうけ、妻として母として家庭を守りました。昭和 20（1945）年 4 月和歌山の自宅を空襲で失い、6 月に劉生の弟子だった富山県高岡市長福寺の住職、雄山氏をたよって疎開します。やがて終戦。昭和 21（1946）年 3 月東京都豊島区池袋に一家 5 人での間借り生活が始まります。このころ麗子さんは極度の栄養失調から目に支障をきたし「お月さまが幾つにも見えるの」といていた母の声は今も耳に残っていると次女の夏子さん

は後年『麗子と麗子像』のなかで書いています。その後、昭和 23 (1948) 年に滝本と離婚し 3 人の子を連れて母の住む新宿区南榎町に同居します。昭和 26 (1951) 年新宿区柏木に自宅を新築し、翌 27 (1952) 年には 11 歳年下のこれも新しき村のメンバーであった臼井幸四郎と結婚して、岸田姓に戻しました。

劉生はわが子の美術教育には熱心でしたから幼少時から麗子さんに絵を描かせていました。それは父亡き後も続けられ、昭和 6 (1931) 年国画会に出品したのを手始めに、一時、文筆活動、新劇女優としての舞台など多忙でしたが終生絵筆を離すことはありませんでした。とくに、臼井と結婚してからは画業に専念し、団体展、グループ展、個展と毎年発表の場を持ちました。

『父岸田劉生』執筆中におマツさんと再会し、思い出話に花を咲かせたことは、この本を書く上で多くの収穫を得たと思われます。

昭和 37 (1962) 年 7 月 26 日、台所に立っていた麗子さんは夫と息子が観ていた TV のオールスター戦の成り行きを楽しみ声援したりしていましたが、突然の頭痛に襲われ、48 歳で急逝してしまいました。原因は、くも膜下出血でした。皮肉なことに『父岸田劉生』は、その 2 日後に雪華社から出版されたのでした。

昭和 54 (1979) 年、読売新聞出版局が新装版を出す際、「最初この本の出来たとき、岸田麗子は手に取って見ていない。その二日前に亡くなったのである。彼女は全力投球してこれを書いたがその本の重さを実感していない。心残りの事である。岸田劉生の掌中の珠である麗子にとって父はまさにキリストさまであり、その文は父に献ずる真心に溢れ、多くの人たちと違うニュアンスがあり、肉親の者にしか書けない真実がある。…」とその後記に杉本健吉は書いています。

おマツさんと鶴沼を語る会

明治 44 (1911) 年 8 月 24 日生れの「おマツさん」(旧姓) 葉山マツさんは、川戸家に嫁し川戸マツさんとなり、5 人のお子さんに恵まれ、今も御健在で満 100 歳、この夏には 101 歳の誕生日を迎えられます。

当時の女の子はお下げ髪にしている子がほとんどでしたが、おマツさんだけはお母さんの好みで鬘を結び素朴な眼差しと紅い頬、引き込まれるような表情を見せる村娘、劉生も創作意欲をそそられたのでしょう。近所の人「うちの子も描いて貰えませんか」と頼みに来た時「誰でもいいという訳にはいかないんだ」と劉生は答えたといひます。それを聞いた時おマツさんは「どんなもんだい」と、とても誇らしく思ったとのこと。

麗子さんと二人でモデルになっていた頃のあのキリッとした中にも愛らしい表情の「村娘」は、これまた多くの人の記憶のなかにあることでしょう。

平成元（1989）年、今から 23 年前、鶴沼を語る会では「鶴沼懷古展」を公民館で開催しましたが、そのときが、おマツさんを知るきっかけだったと記憶しています。

◆昭和天皇が崩御され昭和から平成に移ったその年は、諸行事の自粛で公民館祭りも中止になりました。それに代えて鶴沼を語る会では、単独に「鶴沼懷古展」を開催、3 月 10 日～12 日の三日間、鶴沼に関する写真地図など 162 点を展示、来場者は 1300 人を超す賑わいでした。それら展示物のなかに岸田家三代（劉生、麗子、夏子）に関するものが 4 点あって、塩沢務会長の「劉生の村娘のモデルになった人が来られる」と聞いてお逢いしたのだとおもいます。『鶴沼 48 号』



鶴沼懷古展・塩沢会長とおマツさん



松本陽松園見取図作成（おマツさん宅にて）

◆それから何回かおマツさんのお宅に伺い、いろいろお話を聞かせて頂きました。大正 6（1917）年から 11（1922）年頃までの記憶のなかから、先生（劉生）の印象、モデルになった時のこと、瓢箪池の周りで二人で遊んだこと…などなど懐かしそうにお話しになりました。

つわ藪を持った絵「村娘之図（花持てる）1918 年」はおマツさんを描いた最初の油絵で、「それを頂いたと思うのに母親が押入れかどこかにしまいこみ、その後の引っ越しなどで分からなくなってしまったの、大好きな絵だったのに…」と聞いたときは「今、あったらなあ…」と思わずにいられませんでした。

それからかなり経って古書店で見つけた『岸田劉生・椿貞雄の回想から…』東珠樹著を手に入れ表紙を開いた途端、あの表情をしてつわ藪を持ったおマツさんが目に飛び込んできましたが、それはモノクロ印刷でした。この絵の存在が気になり、神奈川近代美術館の学芸員の方に調べて頂いたら、原画は現存していないが、

『世界名画全集続巻 5』にカラー印刷で掲載されていることを教えて下さいました。さっそく図書館から借りて来てカラーコピーをしておマツさんにお届けしたところ、大変に喜ばれご自身で額縁を買いに行かれ大事に飾って下さっています。

『鵠沼 99 号』

◆平成 10 (1998) 年、鵠沼を語る会の会誌『鵠沼』に“鵠沼の歴史的家屋をたずねて”をシリーズ記事にしようと、その第 1 回に「劉生が住んだ別荘—松本陽松園の記録」が企画されました。松本陽松園は大家の松本さんの所有地に数軒の貸別荘が建てられていて、その内の一軒を劉生は借りていました。この陽松園内の様子もおマツさんはじめ近所の古い方々の記憶をもとに図面化できました。

『鵠沼 76 号』

◆平成 11 (1999) 年 10 月おマツさんに鵠沼公民館までご足労をかけ「岸田劉生、於松がモデルをした時」というお話をさせていただきました。会場は一杯になり、ちょっと恥ずかしそうにいろいろと思い出を語って下さった姿は印象的でした。

なかでも、重要文化財になった「麗子微笑」で麗子さんが掛けている松編みのショールは、おマツさんのものだったそうで、それを劉生はとても気に入って、二人に掛けさせて描いています。「先生はとても丁寧に描くのでホラ見て御覧なさい。この松編みほつれているでしょう。ボロになった所までチャンと描くのだから…」といって笑っておられました。麗子さんやおマツさんのそのころを知っている方々もお見えになっていて、本村にある鵠沼尋常小学校まで、海岸近くから通学するのは大変だった事。丸山先生（丸山行男：劉生の弟子、劉生の世話で鵠沼小学校美術教師として奉職した）は「今日は劉生先生のところへ行くのだろう。早く帰っていいよ。」と帰して下さった話など、大正から昭和にかけての鵠沼のようすが目に浮かぶようでした。

『鵠沼 78 号』

◆平成 15 (2003) 年「80 年前の面影を訪ねて—於松さんと鵠沼を歩く—」という企画で、またまた、おマツさんにご案内をお願いしました。84 歳という年齢を考え、お疲れの際には車椅子を用意してと思いましたが、それは杞憂に終わりました。劉生が最初に住んだ佐藤別荘とは家が近かったのでお母さんが岸田家にお手伝いに通うのに付いて行って麗子さんと仲良くなったといえます。

ショウロを採ったり松林の間を駆け回ったりしました。佐藤別荘は江ノ電鵠沼駅に近い佐藤芳藤園という文献が多いのですが、おマツさんは佐藤別荘は東仲通り（今の天金通り）にあった郵便局よりさらに海側にあったといえますから、この証言は従来説を見直す必要があることを意味しています。

そこから北に向かって少し行くと大正初期に名を馳せた女流作家内藤千代子の家、周辺の様子も分かり大きな成果を上げることが出来ました。さらに学園通りに出て松本陽松園の跡地へ、麗子さんと歩いてから 42 年が経っています。

二人で見上げた、あの画室だったノッポの洋館は跡形ありませんが、敷地内にあった桐の木が健在で僅かに面目を保っていました。大家さんの松本邸が建っていた松山もすっかり低くなっていましたが、幸い松本陽松園の当時の区画は残っていて、劉生の借地の前にあった瓢箪池や太鼓橋の位置、^{かづまや}西阿のあった辺りを指差して説明をされました。

おマツさんは本当によく歩かれて、このあと、東屋の跡記念碑まで足を伸ばして「鶴沼は、すっかり変わったね…。」ポツリと言、しみじみおっしゃったのが印象的でした。『鶴沼 87 号』

岸田夏子さんと鶴沼を語る会

昭和 62 (1987) 年 5 月 5 日に NHK から総合テレビ番組アートファンタジーで「麗子微笑」「画家岸田劉生と娘」が全国放映されました。

麗子さんの次女で画家の岸田夏子さんが麗子役で出演されました。そのとき、鶴沼松が岡で大正期の洋館を持つ O 邸が松本別荘に見立てられてロケに使用されました。

平成 12 (2000) 年には岸田夏子さんはおマツさんをモデルに「89 歳の於松像」をお描きになりました。親子二代ならともかく、お爺さんとお孫さんの両方のモデルになった方はおそらくおマツさんをおいてないでしょう。

また銀座吉井画廊オーナー吉井長三氏が運営する清春白樺美術館（山梨県北杜市長坂町）の館長を夏子さんが務めておられた折、鶴沼を語る会の有志で訪れたことがあります。廃校になった小学校の跡地に立った美術館で、かつての校庭の桜がそれは見事です。夏子さんはその「桜」をテーマにしておられるのです。個展や講演会のご案内も毎回頂き、親しいお付き合いを続けております。

昨秋の 10 月 15 日からこの 1 月 15 日まで鶴沼公民館郷土資料展示室で行われた郷土資料室と鶴沼を語る会との共催による「鶴沼と岸田劉生展」にも、おマツさん、夏子さんはご来場されて鶴沼を語る会会員と親睦の時間を持って下さいました。この楽しく貴重なお付き合いがずっと続くようにと心から願っております。

(ありた ひろかず ・ さとう かずこ)

劉生『鵠沼風景』の舞台考察

渡部 瞭(会員)

昨年の10月15日から今年の1月15日まで、3か月間に及ぶ鵠沼郷土資料展示室の展示『鵠沼と岸田劉生』を終えた。今回の展示は、鵠沼を語る会の永年にわたる劉生への取り組み、特に岡田哲明会員の《かわせみ学園》でのラジオ講座を軸に据え、鵠沼時代の劉生と劉生時代の鵠沼の姿を紹介しようとするものである。

展示に際して大正10年測図の二万五千分の一地形図『江ノ島』図幅を統一して用いた。劉生鵠沼時代に測図された最も正確な地図だからである。この地図を読むと、当時の鵠沼風景をある程度思い浮かべることができる。

鵠沼時代の劉生作品は、何といってもおびただしい『麗子像』が思い浮かぶが、かなりの風景画も生まれている。風景画は代々木時代にも多作された。銀座育ちの劉生にとって、当時の代々木の田園風景は魅力的だったのだろう。練兵場が拡がり、これから明治神宮を造営しようという時代の代々木である。自らのグループ名を《草土社》と名付けたのもその辺が理由かも知れない。

1915(大正4)年、白樺派の武者小路実篤を訪ねて鵠沼に来た劉生は、この地の風景にも魅力を感じ、翌年にも鵠沼に滞在して風景画を制作している。

長谷川路可が「岸田劉生先生が来ておられるころ、写生に出かける時、ついて行って叱られたことがあった。それでも強情に仕事ぶりを見ていた。帰りには絵の具箱を持たされて得々としたものである。」(『随筆サンケイ』昭和39年3月号)と思い出を記しているのはこの時のことであろう。

さらに翌年、肺尖カタルと診断された劉生は、短期間駒沢新町に居を移した後、転地療養先に鵠沼を選んだ。

当初、佐藤別荘に住んだ期間は療養に専念し、静物画程度しか制作していない。佐藤別荘は母屋が二階建てで、^{しげろ}蔡夫人の日記には「この家は、南西の開いた見晴らしの良い家である。二階の縁に立てば西は富士山が麓までよく見えて、続く連山の朝な朝なの景色は、本当に美しい。」とある。

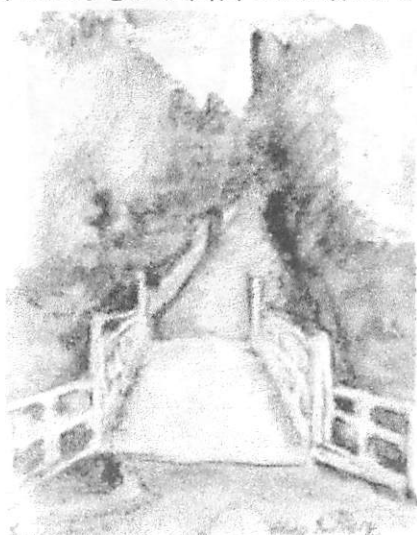
恐らく明治時代に植栽されたクロマツもまだ成長していなかったから、江の島の浮かぶ海も見えたことだろう。

ところが劉生『鵠沼風景』には江の島も富士山やそれに続く連山も登場しない。これは私にとって極めて不可思議なことである。

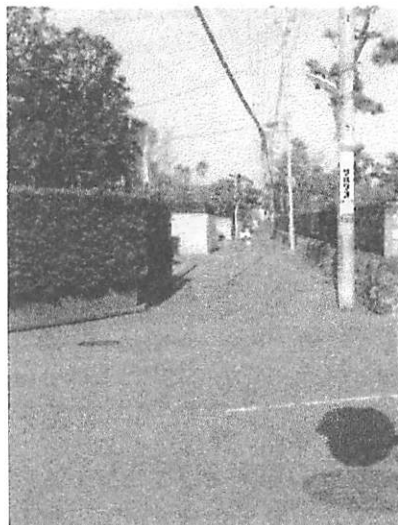
さてこれから、劉生の描いた『鵠沼風景』の舞台を、上記地形図を手がかりに推測してみよう。

① 和泉橋

岸田劉生が鵠沼に転居して初めて描いた風景画が『Kugenuma』と題する絵である。縦位置の画面で、手前に橋があり、その奥にまっすぐ道が延びている。この橋は、古川という堀川田の排水路に架かる白い橋で、「和泉橋」と名付けられていた。橋の南側に^{はざま}碓家の別荘があり、滞在中の碓伊之助を尋ねたときか、海に行ったときかに出会った風景だろう。



Kugenuma (1917)



同一アングルの現状

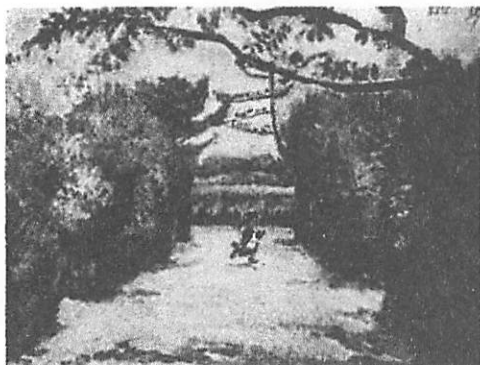
鵠沼市民センターの裏門を出て、右方向へ進むと、やがて大型車がすれ違えるほどの広い道と交差する。ここにあったのが「和泉橋」で、古川は1964(昭和39)年に暗渠化された。右写真中央左のマンホールが暗渠化を示す。この道を「肥上道」と呼ぶ。明治時代、辻堂村の農民が片瀬の尿尿汲み取り権を得たとき、鵠沼村では村内通過を嫌い、県有地との境界線上の道路を通らせたためという。

碓伊之助の二科展入選作にも、この橋を下流の鯉取橋から描いた『鵠沼の白い橋』がある。この愛すべき白い小橋は、画家たちの絵心に響いたのか、他にも何人かの画家によって描かれていることを岡田哲明会員が会誌『鵠沼』第99号に「鵠沼の白い橋」鵠沼を画題にした画家たち」と題して報告された。

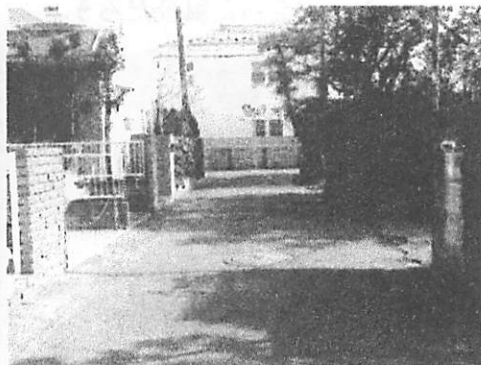
この橋は1923(大正12)年9月1日に津波で流失したと思われるが、白い姿で復旧したらしく、先日会の有志で林達夫邸を見学したとき、長男巳奈夫氏が子どもの頃長谷川路可の画塾で描いた白い橋の水彩画が遺っているのを目にした。

② 松本別荘中央道路

松本別荘に転居した後、風景画を多作するようになる。1919年に制作されたとされるのが『朝の道スケッチ』で、この絵の舞台は松本家別荘に達する中央道路の奥から東を望むアングル。この両側に6軒の貸別荘が並び、図の左側が岸田劉生宅だった一号である。突き当たりは右写真に見られるように現在は建物が建っているが、劉生時代には田園で、白い雲を映す池があり、トンボが群れていた光景を岸田麗子さんが『父・岸田劉生』に綴っておられる。



朝の道スケッチ (1919)



現状

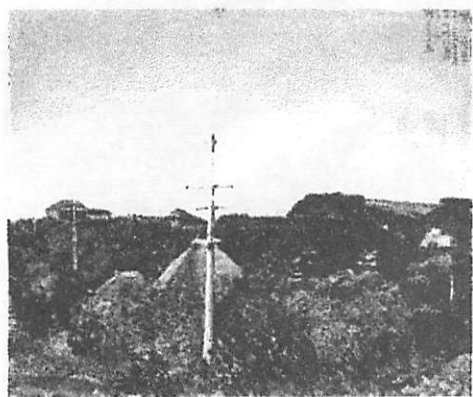
③ 二階からの窗外風景

劉生は、絵の具箱と画架を携えて写生に出掛けるほか、居室にしていた自宅洋館二階の北窓から望む風景を描いた作品を多作している。手前の電柱の向こうに見える茅葺き屋根は「大林」または「林大工」と呼ばれた大工の浜野林蔵家で、その向こうに見える急斜面は、片瀬山丘陵の北端をなす駒立山である。このことは、《鵠沼を語る会》伊藤聖会員によって突きとめられ、会誌『鵠沼』第85号に「岸田劉生の鵠沼風景―「藤沢の山」か「片瀬の山」か」と題して報告された。

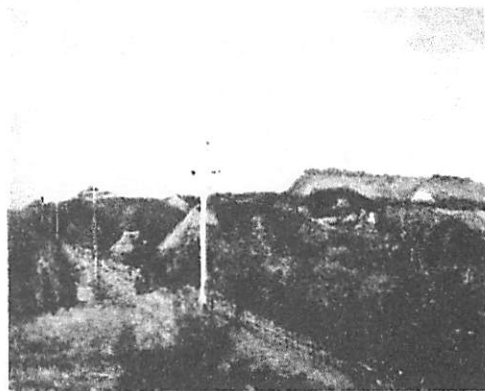
次ページの2作品は、いずれも劉生が借りていた松本別荘一号の洋館二階北窓から描かれたほぼ同一アングルのものである。左の方が古く、右が新しい。題名で判るように半年あまりの時間差を以て描かれた風景である。

比べて見ると、まず、近景の印象がかなり違う。右は写真でいうとズームアウトした構図で描かれていることもあるが、松本別荘前の、後に《(湘南)学園通り》と呼ばれることになる道路が印象的である。左の絵では夏草に覆われていて、そこに道路があるのかさえ判然としない。この道路は2枚の絵の描かれた半年の間

に開通したようにさえ見えるが、そうではない。この道は1895(明治28)年の地積図にも既に描かれていて、現在も松本別荘南方に見られるクランク状の部分が明治時代からあったことが判る。右はこの道路を主題に描いたように思える。



窓外夏景(1921)



窓外早春(1922)

これについては、『日記』1922年3月29日に次の記述がある。

「今日は、前の道を土方が来てひろげてゐる。自働車が通る様にするのだと云ふが馬越さんのところの角でまがるまいと思ふがどんなものか、そんな事で景色がかわるのを心配したがいざ描かうとてみたところこれは又案外で大へん美しくかつちりとした風景になつた。何が仕あわせかしれない。(中略)いゝモチーフになつた。又新らしくこの道を主としたものをはじめてみたい気もした。」

遠景に目を転ずると、スカイライン上の急斜面が目につく。片瀬山丘陵北端にあたる駒立山北斜面で、現在の新林公園裏山に当たる。その右手に赤山が続く。現在は削られて片瀬山住宅地が開発されている。

この部分は形は同じだが、色合いはまるで違う。ことに駒立山手前の斜面は、左図では植物に覆い尽くされているが、右図では赤山より赤い崖が見られる。現在ここは新林小学校裏手にある第三紀層三浦層群凝灰砂礫岩の上に関東ロームが載った崖で、裾には藤沢市史跡に指定された横穴式古墳群もある。両図の違いは単なる季節差とは思えない。

右図の描かれた1922(大正11)年、問題の部分のすぐ手前側の片瀬川沿いに東京螺子製作所が開業した。現在の藤沢市域(当時は鎌倉郡内)では最初的大型金属加工工場で、1975年ミネベアに合併して今日に至る。開業に際して、将来の事業拡張に備えて周辺地域をかなり買収したといわれる。この崖がそのために出現したのだとしたら、劉生のこの作品は歴史の証言者ということになるのだが。

④ 劉生宅すぐ横の道

これらはいずれもほぼ同じ位置から同じアングルで描かれている。場所は恐らく松本別荘劉生宅の前から北東方向を望んだもので、中央の茅屋は浜野林蔵宅、右手遠景に駒立山が望まれる。



霽れたる冬之日(1917)

五月之砂道(1918)→



晩秋の霽日(1917)



⑤ 少し北に行ったところ

右2作品は、当初奥に続く道が緩やかに上り坂になっているので、現在の湘南学園中央道路と思ったが、右手茅屋と白い木柵が「五月之砂道」と同じものである。



路に生えたる枯草(1917)



風景(鶴沼)(1917?)

⑥ 『石垣ある道』の石垣はどこか

劉生の風景画のいくつかには、左手に長い石垣が続き、右側は砂の斜面が見られる直線的な道路が描かれたものがある。鵠沼海岸別荘地の多くの石垣が玉石積みなのに対し、これは鎌倉石の切石がしっかりと積まれており、その上部は木の柱のある竹の四つ目垣になっていて、その内側にはクロマツがきちんと植えられている。右の急斜面の上にもクロマツが見られるが、こちらはまばらである。

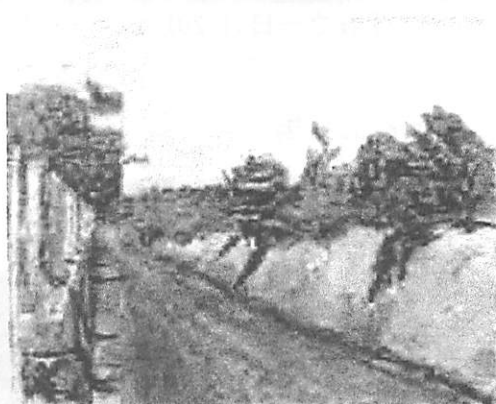
この石垣がどこにあったかという点、劉生の住む松本別荘前の道を左(北東)に向かい、100mほど行ったところで、明治時代には、鵠沼海岸別荘地分譲の中心人物であった大給子爵^{おぎゅう}の別邸だった。劉生の時代の持ち主は宮崎寛愛^{ひろちか}邸になる。現在は数十軒に分譲されているが、石垣は一部がかろうじて残っている。

石垣は、おそらく大給子爵別邸当時に積まれたものであろう。

右手の急斜面は小さな砂丘のアンギュレーションを切り通したもののだろうが、現在は完全に水平にならされている。



石垣ある道(鵠沼風景) (1921)



路傍初夏 (1920)



旧大給子爵邸石垣(戦前)



現状

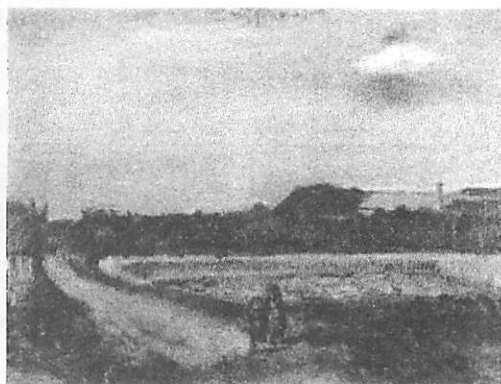
⑦ 広い麦畑

広い麦畑は、1921(大正10)年測図の地形図によれば、現在の湘南学園一带に広がっていた。南西から北東に向かって描かれている。

現在の一木通りから熊倉通りにかけて、さらに広い畑があったが、遠景の片瀬山丘陵の駒立山の展望は砂丘に遮られて困難だったと思われる。

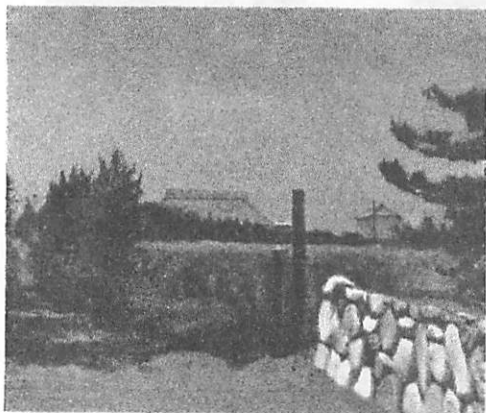


早春之一日(1920)



六月風景(1920)

⑧ 麦畑と玉石垣



初夏の麦畑と石垣(1920) 石垣の様相が違う。同じ石垣を見つけない

『初夏の麦畑と石垣』は、珍しく東から西に向かって描かれている。

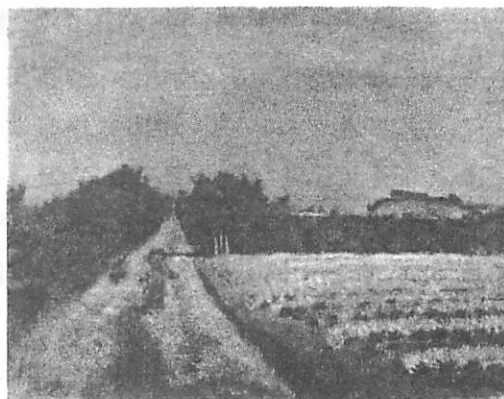
石垣の先から右手が麦秋の畑になり、そこから道幅が狭くなっている。短い棒杭には「佐藤所有地」とある。これが判明すれば問題ない。正面の巨大な茅屋が大林宅だとすれば、横堀角次郎が住んでいた植文から来る道の可能性が高い。「馬越さんの角」から購買組合に向かう道(図上の⑧)か、1本北の道の可能性もある。

⑨ 『麦二三寸』の椿の近所の畑

この作品が完成したとされる1920(大正9)年3月16日の『日記』にはこうある。

「たまらず一時頃椿の近所の畑を写生に行く。久しぶりにトントンかける。麦と砂土の畑と風よけのわらの色、紫にかすむ林の木等素敵なり」

1920(大正9)年2月1日に八軒別荘に居を構えた愛弟子の椿貞雄と劉生は、驚くほど頻繁に相互を訪問して交流を深めた。この「椿の近所の畑」がどこか。地形図には図上の⑨のところに畑が見られる。道が奥に向かって上り坂になっているところ、駒立山の角度からこの畑の可能性が高いと見た。



麦二三寸(1920)

⑩ 同定困難な作品

劉生鶴沼時代の風景画には他に次のものがある。



初夏の小路(1917)



夏の路(鶴沼海岸)(1922)



或る道(1922)

いずれも縦位置で奥に向かう直線道路が描かれている。こんな道は鶴沼海岸別荘地にはどこにでもあったので、位置の同定はできなかった。明確なランドマークが見られないからである。うち、『初夏の小路』は佐藤別荘時代に描かれているから、佐藤別荘周辺だと私は睨んでいる。『或る道』が描かれたときの『日記』には、「馬越別荘の道」とある。正面は丁字路のようだが、見当がつかない。

ランドマークの見られる作品に『煙突のある風景(鶴沼風景)』(1920)があるが、この煙突については、川戸(葉山)マツさんもお存じないとのことだった。

⑪ 蛇足 劉生が描いた鵠沼の富士

小文の最初のページの末尾に、「劉生『鵠沼風景』には江の島も富士山やそれに続く連山も登場しない。これは私にとって極めて不可思議なことである。」と書いた。

『繪日記』にはあるよ」とどなたかが教えてくださったが、これは『富嶽三十六景』を入手し、壁に掛けて眺めている様子で、鵠沼の富士とはいえない。

実は劉生は鵠沼の富士を描いているのを最近知った。それも2作品も。

いずれも鵠沼を離れて京都時代に描かれた日本画だが、画讃に「相州鵠沼」の文字が見られ、鵠沼を想定して描かれたことは事実である。

松の木に囲まれた小流と、釣り人が描かれ、奥に富士と思しき山が描かれている。さすれば、鵠沼時代の最初に描いた作品『Kugenuma』の和泉橋が架かる古川を下流から西を望んだ光景を念頭に描かれたものであろう。

劉生は富士を毛嫌いしていたわけではなさそうである。『日記』には月明かりに富士が見えることを記した文もある。



新緑小閑(1925)



永日小閑(1926)

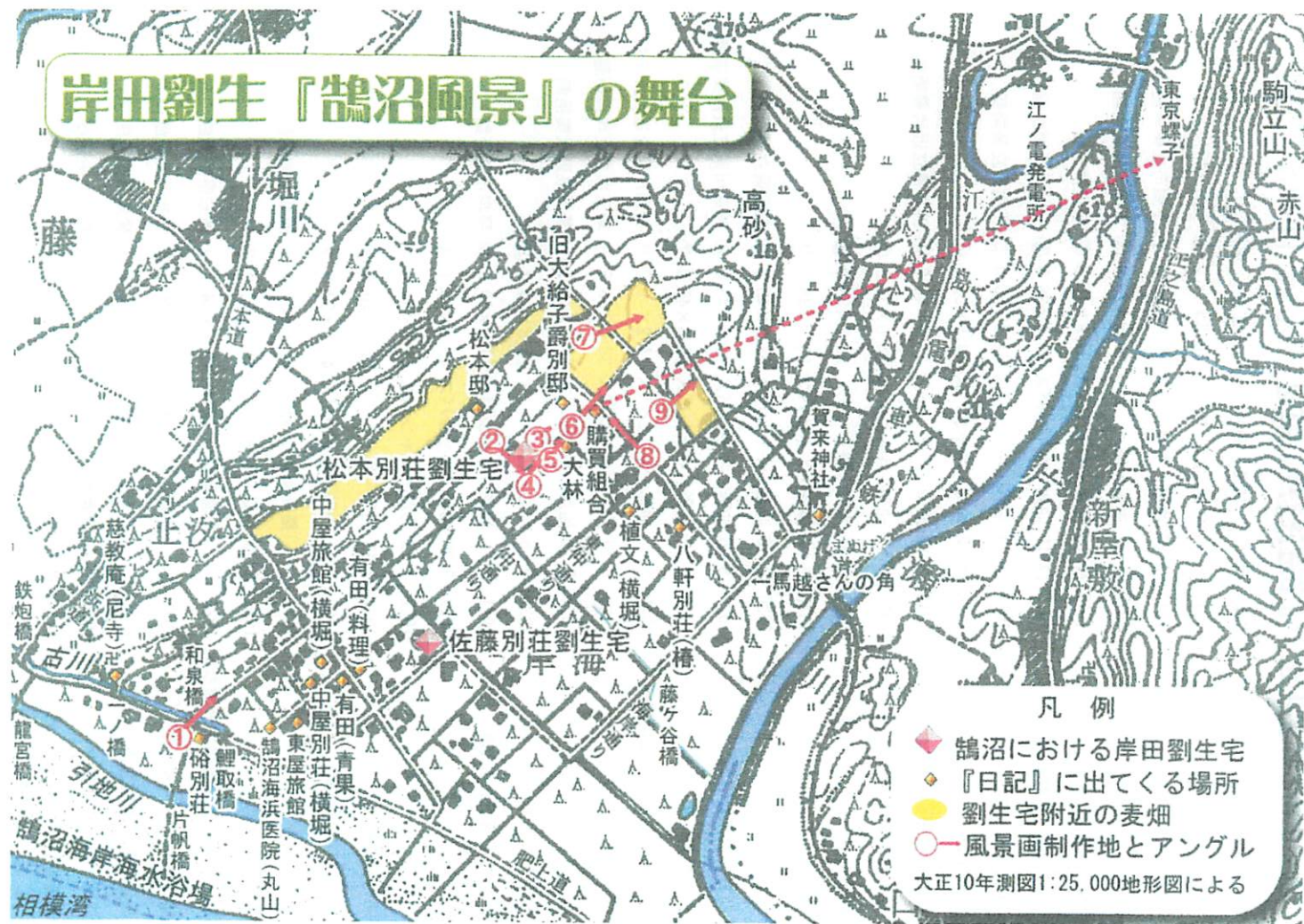
⑫ まとめ 若干の分析

以上、考察を重ねて判ったことは、1919(大正8)年(この年はどういうわけか風景画は『朝の道スケッチ』の1作品しか残っていない)を境に前期の作品はほとんど自宅から数分以内で描かれたこと。後半は若干行動範囲は広がったが、別荘地内の主に北部で描かれたことである。

本村方面や川袋の沼沢地を絵の具箱を携えて訪れていれば、また別の劉生の『鵠沼風景』が生まれていたに違いない。ちょっと惜しい気がする。

(わたなべ りょう)

岸田劉生『鵠沼風景』の舞台



岸田劉生『鵠沼風景』現存作品一覧

画題	年月日	技法・素材	大きさ	場所	所蔵
Kugenuma	1917 5 3	鉛筆・水彩・紙	18.3×14.2 ①		
初夏の小路	1917 5 17	油彩・キャンバス	45.3×37.9 ?	下関市立美術館	
二階よりのスケッチ	1917 6 27	水彩・紙	19.2×23.9 ③	笠間日動美術館	
晩秋の霽日	1917 11 15	油彩・キャンバス	37.8×45.3 ⑤	泉屋博古館	
道に生えたる枯れ草	1917 12 10	油彩・キャンバス	44.5×36.5 ⑤	(財)秋月郷土館	
霽れたる冬之日	1917 12 13	油彩・キャンバス	54.7×50.0 ⑤	千葉県立美術館	
雲雀鳴日	1918 4 12	油彩・キャンバス	44.5×52.0 ④		
五月の砂道	1918 5 16	油彩・キャンバス	31.0×40.9 ④	群馬県立近代美術館	
朝の道スケッチ	1919	油彩・キャンバス	24.0×32.5 ②		
鵠沼風景	1920 1 27	水彩・紙	25.2×33.0 ③		
早春之一日	1920 3 2	油彩・キャンバス	33.2×45.3 ⑦		
麦二三寸	1920 3 16	油彩・キャンバス	37.5×45.5 ⑨	三重県立美術館	
初夏の麦畑と石垣	1920 5 30	油彩・キャンバス	37.5×45.0 ⑧	神奈川県立近代美術館	
六月風景	1920 6 1	油彩・キャンバス	30.6×40.0 ⑦		
煙突のある風景（鵠沼風景）	1920	油彩・キャンバス	14.2×9.0 ?	神奈川県立近代美術館	
路傍初夏	1920 5 17	油彩・キャンバス	38.0×45.5 ⑥	埼玉県立近代美術館	
窓外夏景	1921 7 20	油彩・キャンバス	38.0×45.5 ③	茨城県近代美術館	
二階窓外秋景	1921 10 5	水彩・紙	25.8×34.3 ③		
石垣ある道（鵠沼風景）	1921	油彩・キャンバス	50.0×60.0 ⑥	平塚市美術館	
窓外早春	1922 3 30	油彩・キャンバス	45.5×53.1 ③		
或る道	1922 7 13	油彩・キャンバス	45.5×37.9 ?		
窓外夏景	1922 7 13	油彩・板	27.0×40.9 ③		
夏之路（鵠沼海岸）	1922 7 20	油彩・キャンバス	45.6×37.5 ?		
鵠沼小景	1922	墨画淡彩 / 紙	45.1×34.3 ③	愛知県美術館	
早春霽日	1923 3 23	油彩・キャンバス	44.0×52.0 ③		
鵠沼小景：鵠沼園房窓外雪景図	1923	墨画淡彩 / 紙	45.1×34.3 ③	愛知県美術館	
鵠沼小景：窓外春光	1923	墨画淡彩 / 紙	45.1×34.3 ③	愛知県美術館	
鵠沼小景：夏山急雨	1923	墨画淡彩 / 紙	45.1×34.3 ③	愛知県美術館	
鵠沼小景：秋日閑々	1923	墨画淡彩 / 紙	45.1×34.3 ③	愛知県美術館	
晩夏午后	1923 8 31	油彩・キャンバス	38.0×46.3 ③		
風景（鵠沼）	1917?	油彩・キャンバス	32.8×23.8 ⑤		
鵠沼風景	?	油彩・キャンバス	44.1×51.5 ⑥		

「わたしの鶴沼」

鈴木三男吉(会員)

第1回は、会の最長老、丁度本誌の発行日に百回目の誕生日を迎えられる鈴木三男吉会員です。「自分で書くのはどうも…」とおっしゃるので、インタビュー形式になりました。タイトルにこだわらず、ご自由に話して頂きました。

鶴沼にはいつからお住まいですか？

昭和18年3月、結婚と同時です。帝国ホテルで披露宴を済ませ、ハイヤーで鶴沼まで来たのですが、戦時中でハイヤーも木炭車でした。途中、戸塚のあたりでエンコして、鶴沼に着いたのは夜中になってしまいました。場所はいま岩沢理髪店のある角地で400坪位の土地の真ん中に平屋の大きな家でした。16畳敷きの座敷に1間幅の畳廊下が付いていて、それに8畳6畳、女中部屋もありました。

敷地の入り口も瓦屋根の付いた立派な門がありました。これは家内の母が、占い師に見て貰ったところ、南の方角に別荘を持つと家運が上るといわれて買っておいいたものです。電気、水道、ガス、電話はありましたね。

奥様とのなれそめは？

私の父は軍医でしたが、宇垣軍縮を機に退役、任地だった満州から帰国し目黒に仮住まいの時、小田急線「成城学園前」に朝日新聞が朝日住宅という分譲住宅を売り出し、これを購入して成城に住むことになりました。私は府立四中から7年制の府立東京高校にすすみ、高等科のとき学生運動に参加して退学処分になりました。大学に行きたいが国民精神文化研究所にいて「左傾思想は捨てる」という論文を出し、洗脳されたことが証明されなければ大学入試が受けられない。

じゃ、大学なんかいいやと、マージャンばかりして遊んでいたのを心配した母が、目の前の朝日住宅にお住いの日本評論社の創業者、鈴木利貞氏に息子を使っ
て貰えないかと相談したところ、「明日から来なさい」ということになって、それで日本評論社に拾って貰ったのです。昭和10年11月、22歳のときでした。

利貞氏には一人娘しかいませんでしたので私に養子縁組の話が来まして、それ

コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク

で、一緒になったのです。私は 29 歳、家内は 18 歳でした。

横浜事件のときは鶴沼で拘束されたのですか？

そうです。家にいたときです。昭和 20 年 4 月 10 日のことでした。神奈川県の特高（特別高等警察）が藤沢の駐在と一緒に踏みこんで来ました。

横浜の留置場で取り調べを受けましたが、裁判になる前に終戦になったので、私は冤罪訴訟の当事者にはならずすみしました。釈放されたのは、終戦の翌日から翌々日、8 月 16 日か 17 日だったかと思います。そのときの松下取調官が、のちに鶴沼に住んでいることが分かった時は、びっくりしましたね。

バー「ノアノア」のお話を…

府立四中の頃から東京高校の同級生に渋谷君という元朝日新聞論説委員の息子がいて彼のお姉さんが日本女子大生で共産党活動をしていました。或る日、彼に連れられてお姉さんに逢ったのです。大変な美人で、それで一緒に共産党活動を始めたのが、先程言った退学処分を食らう羽目になったわけです。

あるとき、共産党の活動資金を得るためにバーでも始めようと金持の息子だった三角君というのが出資して、新宿三丁目にあった市電の車庫の裏に 3 階建て、1 階は喫茶店 2 階はバー 3 階は事務所（アジト）という立派な建物を作りました。

そのころ私はもう日本評論社にいましたから昭和 11、12 年だったと思います。

店としては繁盛したのですが、売上金を持って皆で見学と称しては銀座へ飲みに行ってしまうと、とても活動資金に回らない。これではいかんと、私が提案して資本金の回収が出来るうちにと売却してしまいました。

宇垣軍縮：1925 年、第 1 次大戦後、世界的軍縮に呼応し、宇垣陸軍大臣が実施した陸軍軍縮。

国民精神文化研究所：1932 年、学生生徒左傾対策として設立された文部省直轄研究所。

横浜事件：戦時下最大の言論弾圧事件。編集者記者約 60 人逮捕、拷問により 4 人獄死。

ノアノア：放浪の画家、長谷川利行にノアノアの女を描いた有名な作品（1937 年）がある。

鈴木さん達が作った店ということは全く知られていない。

Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break

江見水蔭・片瀬の居住箇所はどこ？

竹内 広弥(会員)

浪静かなる相模灘に白帆は走る五個六個。一個は黒き帆の動かず、
と見しは名代の烏帽子岩で、雲更になき南方の端に烟を吐く大島
の幽か。さてはこの日を初霞、あるかなしかに包まうずるか。江
の島や如何ならんと眼を東北に転じた時に、あたかもわが視線を
導くかのよう、千鳥の群れは彼方に飛んだ。なつかしの江の島や、
腰越の突角、片瀬の高台、我はかの松黒き下に十年の昔、かり住
居して、砂に埋もれ了らんとした。

この情景描写は『^{みぞれ}曇』の一節である。『曇』は明治36年、川上音二郎一座が『オセロ』の脚本の本説を旅館・茅ヶ崎館で行ったときのエピソードをもとに、シェークスピアの『オセロ』を翻案した江見水蔭が書いた短編小説である。

昨年(2011年)、7月21日に鵠沼を語る会宛てに一通のメールが届いた。差出人は茅ヶ崎在住の水沢不二夫氏(文学研究者)で、その要旨は、“茅ヶ崎市の「川上音二郎・貞奴を顕彰する会」では、江見水蔭の『曇』の朗読会を9月に催します。『曇』には茅ヶ崎の海岸から、かつて江見水蔭が住んでいた片瀬海岸を眺めるシーンが何か所かあるのですが、水蔭の片瀬の居住箇所がはっきりとはわかりません。いくつかの文献は見たのですが、江の島への参道の鳥居のあったところという以上の情報が得られませんでした。水蔭の住居の正確な場所を把握していまして、お教えいただければ幸甚です”というものであった。

6月末から椎間板ヘルニアで半月以上寝込んでいたが、幸い痛みは和らぎメール操作もできる状況になっていた。何人かの会員に江見水蔭の片瀬の居住箇所をご存じないか訊ねると、たちまち貴重な情報・資料が届き大体の位置見当はついた。有田会長もこの件について興味を持ち早速、「硯友社と紅葉」なる古本を取り出してきた。なんとその中に江見水蔭が居住していた片瀬の家(沙地浪宅)の写真が載っているではないか。家の背後に大きな松が写っており、これを見て「あの松と似ている」と有田会長がニヤリとする。たまたま一週間ほど前に、ある会合の帰りに片瀬の州鼻通りを通ったときに見た松と同じ印象だ、とのこと。

ちょっとした宝探し気分

小林政夫会員から届いた明治中期の片瀬の地図と州鼻通りの一番高いところに鳥居があったという情報をたよりに、ちょっとした宝探しの気分になって有田会長と自転車で、その松を見に行った。



「硯友社と紅葉」に掲載の沙地浪宅

まず小田急線の片瀬江ノ島駅側から川向こうに、それらしき松を探す。大きな松なので、すぐ分かった。そして州鼻通りを海側から入りしばらく行くと、左手に紀伊国屋旅館、石政旅館があり、その背後に大きな松が2本ある。一瞬、「硯友社と紅葉」に載っていた江見水蔭の家の雰囲気と同じものを感じた。その先が鳥居のあったと思われる高台で小さな十字路になっている。そこから先は江ノ電の江の島駅方向に下がっており、鳥居跡はここに間違いなさそうである。片瀬川方向に下ると左手に州鼻ポンプ場がある、と聞いていたので確認する。さらに近所の人に、昔こころ辺りに鳥居があったか訊いてみた。「鳥居があったことは聞いている。関東大震災で倒れ、その後、台座は江島神社に運ばれ鳥居の再建はなかった」とのことである。

「硯友社と紅葉」に載っている江見水蔭の片瀬の家は、水蔭自身が「^{さじろうたく}沙地浪宅」と名づけている。江の島道の鳥居の脇の片瀬川に臨む高台にあった、サムエル・コッキングの貸別荘（コッキングの妾の家）で、水蔭は明治29年4月から1年9ヶ月、そこに住んでいたということが会員からの資料で分かった。

江見水蔭についていろいろ調べてみると、水蔭著の「自己中心明治文壇史」に辿りついた。その著書の中に「片瀬の浪居」と題する記述がある。

「江の島道一の鳥居、片瀬村の役場の前に貸別荘があった。それは江の島の勝地を占領して別荘及び植物温室を建築してゐる英人コッキングの所有で、其洋妾宮田某女の名前に成つてゐた。某所を一年五十五圓の契約で借りる事にした。（中略）

家は片瀬川に臨む高地に在つて、小砂漠の観ある砥上ヶ原を越して、鵠沼、辻堂、茅ヶ崎の海岸を見渡し、相模灘の一部から、烏帽子岩、大磯の高麗寺山の上あたりに富岳をも遠望し得て、風景正に絶佳なのであつた。

八畳、六畳、四畳半、二畳、それに墓所及び湯殿が附属してゐて、庭地も廣かつた。」

正しくは二の鳥居

江見水蔭はコッキングの貸別荘の在り処について「江の島道一の鳥居、片瀬役場の前」と書いているが、正しくは二の鳥居である。江の島弁財天の一の鳥居は遊行寺の下、藤沢橋の近くに明治の中ごろまであった鳥居で、一昨年6月、小林会員の案内で「かまくらみち」を散策した際、その跡を確認した。江の島の栈橋を渡った島口にあるものが三の鳥居で、片瀬海岸・州鼻通りの一番高いところ（現・片瀬海岸1丁目）の砂地に建っていたのは二の鳥居である。一の鳥居、三の鳥居は唐銅であったが、この二の鳥居は石の鳥居であった。

沙地浪宅の背後にある松と石政旅館の脇の松とが同じかどうかは分からないが「ここしかない」という直感を信じ、現在の州鼻通りの石政旅館あたりを江見水蔭の居住地と見立て写真に二の鳥居を書き込んでみる。

小林会員からの明治時代の地図をもとに当時の地番を調べると、石政旅館のあるところは2640の表記がされている。どうもこの地番の「2640」という数字が、今回の宝探しのキーになりそうだ。

問い合わせをされてきた茅ヶ崎の水沢氏に、これらの写真、地図などを添えた資料を送り、確定的ではないが現在の片瀬海岸1丁目、石政旅館あたりと思われる旨、返事をした。

茅ヶ崎では川上音二郎・貞奴を顕彰する数々のイベントが昨年9月～11月に企画され、水沢氏たちは前述の江見水蔭『雲』の朗読会を担当したメンバーである。

当会に問い合わせる前に辻堂の法務局で江見水蔭の居住箇所を探したが分からなかったとのことなので、これ以上調べるのは茅ヶ崎グループの役割と心得、我々の宝探しはここまでにしておいた。



現在の州鼻通り片瀬海岸1丁目あたりの様子



現在の州鼻通り片瀬海岸1丁目あたりの地図

まさに「2640」は宝探しのキー

その後、茅ヶ崎グループの皆さんは再度、法務局を訪れ、旧土地台帳から江見水蔭の沙地浪宅となったサムエル・コッキングの貸別荘の所在地を確定した。旧土地台帳をみると二千六百四十番ノ三で名義人は宮田リキとある。まさに「2640」は宝探しのキーであった。茅ヶ崎グループはその足で片瀬海岸・州鼻通りの石政旅館あたりを検証、グループの一員(園芸業)は沙地浪宅の写真の松と石政旅館脇の松は同じもの、と同定している。



旧土地台帳で沙地浪宅を確定

片瀬に来たころは売れっ子作家だった—江見水蔭



江見水蔭(明治2年～昭和9年)は文学作品をはじめとし通俗小説、推理小説、冒険小説、探検記など多岐にわたる分野に作品を残したほか、硯友社に属し博文館などで雑誌の編集発行に関わった。片瀬の沙地浪宅に移った明治29年ごろは売れっ子作家であったが、そのうち定収入もなくなり神戸の新聞社に行くことになる。沙地浪宅には尾崎紅葉など硯友社同人をはじめとする友人たちがしきりに訪れ、賑やかで自堕落な暮しを展開。水蔭の言葉を借りれば「怠け者が身分不相応に食客を引き受けて、毎日酒に溺れ」たのである。

江見水蔭は片瀬時代に、また硯友社のメンバーとして鵠沼の東屋に訪れており、こうした硯友社の集まりが東屋の文士宿として定着してゆく基礎づくりになったのではないかと、いわれている。

作品の代表的なものは随筆『自己中心明治文壇史』だが、『女房殺し』『船大工』『水華姫』『海賊の恋』『姥島探検記』『竜窟探検記』『片瀬船』『江島道』『海水浴』『別荘守』など、片瀬・江の島、鵠沼、茅ヶ崎を舞台にしたものが多い。

*

茅ヶ崎での江見水蔭『甕』朗読会(2011年10月23日開催)には当会からも数名、参加。映像・音響効果をきかせた素晴らしいものだった。会場入口には水蔭の片瀬の居住箇所についての展示もあり朗読会后、今回のことが鵠沼と茅ヶ崎の文化交流の切っ掛けになれば、と茅ヶ崎グループの皆さんと歓談した。

(たけうち ひろや)

首塚の碑再建

鵜沼最古の記念碑が最新の記念碑に

渡部 瞭(会員)

宮ノ前町内会館の脇にある「首塚の碑」は鵜沼地区現存最古の記念碑だった。

記録では、1808(文化5)年8月15日の「堀川改修記念碑」の方が古いが、現在の碑は1932(昭和7)年8月23日に再建されたものである。

2011年の2月3日(木)に、鵜沼公民館の催しで「相模国準四国八十八箇所」のうち鵜沼地区にある札所を案内した時には、前を通りかかったついでに若干の解説を加えた。ところが、4月に入って前を通ったら、碑は台座ごとすっかり消えて、更地にコンクリートが張ってあった。

1週間ほどたって夢を見た。「ああ、あれは3月11日の地震でぶっ倒れて、粉々になったので処分したんだよ」という話を聞いたというものである。あり得る話ではないか。面白かったので、wifeに話してみた。早速、知り合いの宮ノ前町内会のM氏に電話を掛けてくれて事情が判明した。

余りにも風化剥落が激しいのを見かねた林石材産業㈱社長の林 一郎氏が自費で再建を申し出て、宮ノ前町内会長のW氏や有志のM氏らと検討し、藤沢市教委生涯学習課の文化財担当者にも連絡を取って、黒御影石の碑と白御影石の台座という形で再建することになったというものである。

早速林石材を尋ね、事情を伺った。最も気がかりだったのは、題額の書体である。題額は後述のように当時の県令野村 靖が書いたものである。これは是非残して欲しい。林氏もそれを心がけておられるということで安堵した。

宮ノ前町内会の有志では、毎年春の彼岸には万福寺・空乗寺両寺院の住職による供養を欠かさなかった。今年の春の彼岸の供養の後、碑の魂を抜いて取り壊したという。

新碑の除幕は4月29日(金)、空乗寺住職を招いて執り行われた。

私が残念に思うのは、旧碑の処置である。生涯学習課では適当に処分してよろしいということで、廃棄処分になったという。旧碑は他に類例を見ないかなり特殊な記念碑だった。風化剥落により判読不能ではあったが、明治初期にはこんな特殊な石碑が建てられたという文化財としての価値はあったと思う。

藤沢市は公立の博物館も美術館も文学館もないという全国唯一の40万都市であ

る。「博物館建設準備担当」というのが置かれているが、収蔵庫は満杯で、十分な学芸員も配置されていない。文化財に対する配慮が行き届かないため、みすみす失われる文化財が多いのではなかろうか。

もう一つ残念なのは、林石材の再建した碑文は、何を参考にしたのか聞き漏らしたが、藤沢市史や伊藤節堂氏の調査と若干違う。正確を期して欲しかった。

首塚の碑については『皇国地誌村誌相模国高座郡鵠沼村』では、

首塚 中央ヨリ西北隅字宮前ニアリ暴ニハ塚上ニ庚申塔一基松一株アリ里人之ヲ首塚或ハ金堀塚又ハ庚申塚ト唱ヘ其何タル不分明ナレハ曾テ之ヲ発クニ首骨数十百脚骨四アリ集メテ之ヲ一甕ニ納メテ改塹シ其上ニ碑ヲ樹テ首塚ト標ス何人等ノ枯骨ナルヤ知ヘカラス

と出てくる。

これが刊行されたのが1879(明治12)年2月。ほぼそれと同時に「首塚の碑」が建てられた。

『皇国地誌』の総関者は神奈川県令=野村 靖。そして、「首塚の碑」の題額も野村 靖によって書かれた。

野村 靖の五女=初子は松岡静雄に嫁ぎ、1922(大正11)年以来鵠沼海岸に住んだ。松岡静雄の子孫は今もお住まいで、静雄の孫にあたる故松岡 喬氏は「鵠沼を語る会」の会員として活躍された。氏の遺稿ともいべき文=「首塚」の碑と野村 靖が『鵠沼』第88号に掲載されている。

首塚は「金堀塚」とも呼ばれ、空乗寺の山号にもなっているのだが、現在は失われ、その正確な位置も判然としない。碑文では「永正の頃、殊に国のうち乱れて戦いの巷になったので、その頃のものと思われる」としているのだが、私は古墳時代のおそらく円墳ではなかったかと思う。

碑文の文章形式は「和歌の詞」と呼ばれるものである。「和歌の詞」とは末尾に和歌をおいて、その前に「なぜその歌が詠まれたのか」という事情や経過を「けり」による叙述によって順に説明してゆく文章形式で、代表とされているのは「伊勢物語」(950年頃成立)である。使われている文字は変体仮名というか万葉仮名の草書体といったもので、すこぶる読みにくい。詳細は鵠沼を語る会ホームページの「鵠沼地区のモニュメント一覧」を参照して頂きたい。

(わたなべ りょう)

[参考文献] 伊藤節堂：「鵠沼碑文集其の一五」『鵠沼』第10号

松岡 喬：「首塚」の碑と野村 靖『鵠沼』第88号

家犬三代記

今井 達夫

夜中に庭から犬の鳴き声がひと声聞こえて来た。馬座は最後の声かなと思ったが、となりの寢床に眠っている妻を起こすのをやめた。このところずっと弱っているマヤだ、死ぬのは覚悟していたから、寒い夜中に起きて行っても仕方あるまい、いや、妻を起しても無駄になるとあきらめた。馬座自身はひとりで起きて見に行くことの不可能なからだになっている現在である。

マヤは二代目マヤで、もう十年馬座の家に飼われて来たが、初代マヤが死んだ翌年素人犬屋が元日生まれとふれこんで持って来た犬である。この家に住んで満二十年を越えた馬座家で、最初のジンと名づけた黒い中型の牡犬を飼ったのは、泥棒にはいられたためであった。

「新築の家にはどこかに戸締まりの不備があるもので、あいつらはそこを狙うんですよ。」

調べに来た警官はそういったが、書斎の風入れ窓のせまいところの雨戸をあけてはいりこんだ泥棒は、その書斎を荒しただけでひろいホールまではいらなかったから経済的被害はわずかですんだ。ホールのテーブルには現金のはいつている紙封筒を投げ出したままだったのである

しかし、警官に申告した盗難品目録は、馬座をして首をかしげさせた。それぞれ記念品的価値のあるものばかりで、第一に新築祝いといって送ってくれた夜具一式の皮だけをはいで持って行ったのである。妻の実家からの贈りものであるそれは、書斎のまんなかに綿だけが積みかさねてあったが、——いや、まず発見者についてひと言紹介しておこう。

現在もそうだが朝のおそい馬座夫婦の寝室の雨戸をたたいたのは、若い女中であった。

「大変です。泥棒がはいりました。」

その声で起き出してみると、高い松の枝のあいだから漏れて来る太陽の光の下で、その女中は書斎を指さしていた。行ってみると、今いったように蒲団綿だけが手ぎわよく積み上げてあったのだ。蒲団綿がすこしも崩れていないのが、むしろ異様でさえあった。それについてあとから来た市警察の刑事がこういう観察を

述べた。

「これだけ手際よく皮をはがすところを見ると、ふとん屋の経験のあるやつだな。」

なるほど、机の上の鋏を使って縫糸を巧みに切り、布を傷つけた模様はうかがわれぬ。馬座は感心したが、この盗難についてはこれ以上こだわるわけには行かない、盗まれた品がみんな何かそういう価値をもっていたものばかりで、それらの品を収めて行った鞆が友人のヨーロッパみやげの記念品だったことが仕上げになったとだけつけ加えておこうか。

その盗難事件が犬を飼う気持ちをおこさせ、知人の世話で急遽来たのが前述のジンである。間に合わせの日本犬だ、犬の医者が見に来て保健所への届けを書い
てくれながら、種類という欄まで来たとき相談するみたいに馬座の顔を見た。

「何としましょうかね？」

専門の医者の迷う犬の種類を馬座がきめるわけに行かない。咄嗟に浮んだ言葉を口にすると、医者は即座に同意をした。

「なるほど。雑種としては純粋だから純粋雑種ですか。これはいい。」

面白半分に口にしたその名称を用紙に書き入れているのを見ながら、馬座はジンに対してすこしばかりうしろめたい気分になった。が、当のジン自身にそれが伝わる筈はない、生後三ヶ月の彼はただ疑いぶかい目つきを見せただけであった。

しかし、はたして人間たちの面白半分の心持をジンがかんじなかったかどうかは、断定できない。というのは、この純粋雑種が三匹の犬のうちでいちばんするどい神経の持主だったからである。全身真黒で四肢の先端だけ白い中型犬は、はじめのうち屋内で飼われていたためか、主人たちの気持ちを読む能力をそなえたかのように見えた。馬座家へ来たのは早春だったが、初夏のころこんなことがあって彼を見る馬座の目を新たにしたものである。

馬座の家には中央に板敷きの十二畳ほどの部屋があつてホールと呼んでいるが、壁の色は白でまんなかに爐が切つてある。この設計には馬座の感傷的趣味が籠めてあるが、この物語には直接関係がないから省略しよう。その火のない爐ばたに出した食卓の前にあぐらをかいた馬座が、夕刊をひろげてビールを飲んでるときであった。膝の前にかしこまっていたジンがひよいと卓上へ頭を突き出したと思うと、鰯のフライを口にぐわえた。

「こらッ。」

その動作が目のはしにはいつて来たので、馬座は反射的に叱責の声を立てた。

ジンは驚いた姿勢で鰻のフライを床に落し、庭へ逃げ出した。馬座が立ち上がったあとを追ったのは、こういう癖をつけさすまいと思ったからである。

庭へとび出したジンは馬座の追跡から逃れようとして、家の周囲をまわりはじめた。以前となりの松林にはいりこみ、引きずっていた鎖が木の根株にからみついて悲鳴をあげて助けを求めた前歴の持主だのに、よそへ逃げて行こうとはせず家の周囲だけを走りつづけているのが、馬座には殊勝なものにかんじられて来た。もともと食卓のものに手を出す習慣をつけさせまいとする追跡だったから、逃げようと思うならどこへでも行けるのに、家の周囲だけをまわっているジンの神経に詫びの心持ちを読みとらずにいらなかったのである。

ジンは途中で幾度か振り向き馬座の姿を見るとまた走り出した。三度家の周囲をまわったとき、馬座は逆もどりをして待ちうけた。それと気づかなかったジンはいきなり馬座と正面衝突をして、あともどりをする余裕を失い砂地に腹這いになった。そのときの彼の目の表情には恐惶謹言^{きょうこうきんげん}という文字が書いてあるかのごとくであった。

この追いかけてごっこは、彼と馬座とのあいだの親しみを倍加するのに役立ったばかりでなく、食卓の上のものには手や口を出してはいけないのだと心得させたといっている。だが、これくらいのことは、ほかの犬だって持つであろう心得といえる。ジンの場合特に取り上げたのは、食卓の上の皿にならんでいた二尾の鰻のフライのうちから彼のえらんだのが小さい方だったことである。しかも、その小さい方は彼のかしこまっていた位置からすれば、遠い方にあつたのである。馬座はこの話をひとに伝えるときこういった。

「ふたつならんでいるのから遠い位置にあるやつをくわえたんだがね、それはどういう心理がはたらいたんだらうね。しかも、皿のほかの部分つまりキャベツだのポテトフライなんかを全然ちらかさなかったんだよ。」

あとになれば大分ジンを自慢する犬バカの気持ちになったのは疑えない。そして、あの日ジンはどんなにか食欲をそそられがまんがまんを重ねた末ついに誘惑に負けた心理も十分察しることができた。あのとき馬座は夕刊の記事に気をとられていたのに、ジンの小さな動きを悟ったのも、不思議といってよかった。

その後、ジンは庭の松の木から松の木へ張った針金に鎖をつなぎ、自由に庭を走りまわれる状態におかれることになった。もっとも、ひどい雨の日などには家のなかに上げてもらい、ひどく身分がよくなったという表情を見せたりしたが。そういうとき、彼は庭へ来るほかの犬たちには目もくれないことで、その心持を

表現したものだ。

馬座はその後書斎を二階に移したが、二階でふと耳を澄ますことがある。彼が何かで文句をつけると、妻は小さな女中に叱言をいう。すると、女中は庭に出てジンを叱るのである。

「ジン、お前は どうして そうわからないの だろうね。ダメですよ、もっとお行儀よくしなければ。」

そういうとき、ジンがどんな顔をするか、馬座は好奇心をそそられるが、わざわざ下りて行くのは角が立つからじっとがまんをしている。すると、おかしさがこみあげて来て最初の不機嫌が消え去ってしまうこともたびたびあった。馬座は結婚以来十年を越したが子供はいない、それが不機嫌の順序をこんなふうを受け継ぐことになるのだが、最後に引きうけるジンの顔が見たいというのは、ジンの神経をみとめているからである。

次にきたのが初代マヤで、ジンの配偶という意味だから、いうまでもなく牝犬であった。柴犬だから大体大きさは想像がつくだろうが、マヤと名づけたのは、それをもらって来た妻が庭から呼びかけた、

「可愛いでしょ。なんて名前をつけようかしら。考えてくださらない？」

そのとき馬座はマヤという女を主人公にした連載小説を書いている最中だったので、記念にする気持ちでその名を取ったのである。

「いいわね、マヤ。あんたの名前よ。マヤ、マヤ。」

茶いろの仔犬は妻の腕のなかで、小さく尻尾を振った。いかにも名前をつけてもらったのを喜んでいるといった風情で、馬座はこいつは案外ジンより利巧かも知れないぞと買いかぶった。ジンは中型ながら力が強く、精悍なところがあつたのに対し、マヤの方は牝らしく華奢な体躯の持主で、呼びかけるとちょっと首をかしげてこちらを向いたりするところなど、いかにもなんですかと訊きかえしているみたいに見えた。

「利巧 そうな犬じゃないの。何を考えているのかしら。」

そんなそぶりを見た妻の友人が感心したこともあった。

しかし、それが買いかぶりであることは、次第に明らかになった。一度はそのもっともらしい首のかしげ方にだまされた馬座だったが、そういう形が何かの意味を持っているのではなくなんとなくやってしまうのにすぎないことを発見したとたんに、利巧どころかむしろ阿呆ではないかと思うようになった。ためしに大きな声で叱ってみても、マヤは同じ形に首をかしげるのである。ジンならば恐縮

した姿勢を示し瞳に陳謝の色をうかべると同じケースに、マヤはなぜそんな声を出すのかしらと怪しんでいるみたいな表情しかうかべないのだ。

「こいつ不感症かな。そうでなければ、大変な^{モリ}運女だろうな。」

馬座はマヤを目の前においてそういったことがある。マヤは自分が話題になっていることは悟ったらしく、首をかしげただけでなくしきりに尻尾を振って愛嬌を振りまいた。

しかし、不感症であるかどうか、つまり、叱られたのを認識するしないは別として、人間のそういう情緒に対しては大変敏感な反応を示した。夜、海岸へ散歩に行くとき連れて行くと、ランデヴの男女に出会うことがある。そういうときのマヤの反応がおもしろかった。まるでわるいところに来合わせた、わたしは見ませんからどうぞ御自由にといい抜き足差し足の姿勢で通りすぎるのである。

曳いている綱につたわって来る反応がそれを教えるのであった。

それにくらべると、ジンの場合とは別であった。やはり夏の夜の海辺だったが、そういう男女のそばを通りかかると、不思議なものにぶつかったかのように歩くことをやめ、鎖を握っている馬座が力をこめて引っぱるまで、動こうとしなかった。夜だからその色まで見るわけに行かなかったが、きっとその目には疑わしげな光があったろうと馬座は今でもうなずいている。

ジンは八年ほど生きて死んだ。どうやってやるのか現場を見せたことがないからわからないが、彼は首環をはずす名手であった。どういう心境のときにやるのかわからないのは残念だが、馬座の推測想像ではその純粋雑種らしい野性がふと蘇って来たときではないかと思う。そういうとき彼は首環からずりりと脱け出して行方をくらます。前に一度鎖をつけたまま逃げ出し、となりの松林で自由を失った記憶が教えるのであろうか。うごきまわれるよう針金に鎖を通してあるのだが、ある朝首環がまるくそのままの形でこっているのを見て奇妙な心持に馬座はおそわれたものだ。

しかし、まる一日と行く方知れずになっていたことはなかった。まだ明るいうちにどこからと見定めるひまもなくまっしぐらに走りこんで来て、ホールへ駆け上がるのはまるで何かに追われてのごとくであったが、もちろん彼を追って来る者はなく、追われているとすれば彼自身の気持ちからのようであった。息を切らしてもどって来る彼は、先ず水を腹一杯飲み従順に首環をはめてもらい、小屋にはいって寝そべってしまう。そんなとき、どんな冒険を経験したかしやべってもraitakと思う馬座であった。いや、ジンがしゃべれるならほかにもっと訊きたい

ことのあった馬座だが、これはあとの話だ。

ジンが息を切らして帰って来ると、マヤはいつも尻尾を振り首をかしげて歓迎したが、ジンの方では相手にならなかった。ただ遠くを見る目つきで何かを考えている表情を見せるだけであった。しかし、最後の脱出のときはすこしちがった。それが命取りになった脱出だったが、ジンは勢いなくよたよたとやっとたどりついたという姿勢で庭へはいつて来て、それをマヤの鳴き声が知らせるという順序になったのである。

「大変よ、ジンのからだが冷たいのよ。どうしましょう。」

妻の叫び声で二階から下りて行った馬座は、呼吸困難になっているジンに向かって、

「おい、どうした？ 何かわるいものを喰べたんじゃないか。」

頭を撫でてやった。いつもならその手を舐めて来るのだが、その元気もなく訴える目の色にも光がなかった。

「寒いのでしょうか。ふるえているわ。」

妻は抱いて家のなかへはこび、火燵に入れてやった。電話で呼んだ医者は、馬座の推測を裏書きした。

「近ごろは農薬のはいつているのを喰ってやられるのが多いですよ。」

医者は薬を吞ませ注射をした。狂犬病予防注射もきらうジンだが、病気の手当をうけている自覚があるのか、おとなしく医者にするままになっていた。そういえば、ジンだけが家のなかへ入れてもらったりすると嫉妬でさわぎ立てるマヤも、馬座たちの気はいから事態を察したのか、利巧そうに見える顔にさらに憂いをうかべしんと静かであった。

医者は毎日来てくれたが、ジンは結局三日目の晩死んだ。注射の効き目があってやや元気を取りもどしたかに見え、玄関に座布団をしいてそこにおいておいたのだが、馬座が二階の書斎にいるあいだに死んだ。仕事が終わって下へおりていくと、

「ジンが死んだのよ。さっき玄関からホールへはいつて来てあたしの見えるところで死んだのよ。」

妻はホールでジンの死体を毛布で包んでやり、そのそばに坐っていた。馬座は椅子に腰を下ろした。

「まあ、毎日医者に手当をしてもらったんだから、あきらめるんだね。俺の打ったことのないペニシリンの注射まで打ってももらったんだ。」

おしまいを冗談めかしていうと、妻は無言で、怨めしげに涙のたまっている目で馬座を見上げた。

マヤが死んだのはその翌年のことで、華奢に見えるからだつきの割に健康な方で、ジンにくらべると医者にかかることなどめったになかったが、結局ヒラリヤにやられて生命を失った。ジンの死後はよけいに世話をうけたのだが、むしろ寂しげであった。そのころ女中がいなくなり、馬座夫婦だけだったのがマヤには心ぼそかったのかも知れない。

相変わらず首をかしげる恰好は訪問客たちの目を惹いて、利巧そうな犬との評判は落ちず、ひとりでおぼえたチンチンだのお手だのでお世辞を振りまいたものである。ジンを飼いはじめたころはよく海岸へ散歩につれて行ったが、次第に興味がうすれるとともに億劫になって来て、マヤはほとんど庭の針金につたって歩くのを運動方法にさせられることになり、それを不満としないような性質の持主でもあった。

そのことはまだ幼年だったころの記憶を馬座に思い出させた。五十年も経っているから、思い出しても感情を揺さぶられるというほどのことはないが、幼いまま死んだ妹と母親の膝をうばい合った記憶は、そのときすでに意地わるをしている自覚があった。幼いといっても母の膝はふたりの子供を載せるほどの広さは持っていなかったから、馬座がもっとそっちへ行けと妹を押してやると、かの女は落ちそうになりながら母親の腕にやっと支えられていたのである。

母の膝に腰をかけた記憶はそのとき以外にない馬座で、だからそのときもひどく居心地がわるかったにもかかわらず妹に席をゆずらなかつた心理は、今もって後味のわるい想いをのこしている。幼い馬座は、妹が反抗するか母がたしなめてくれるかを待っていたようだ。ところが、涙ぐんでいたかも知れない妹は無言で膝の隅の方にちぢこまり、母も妹のからだを支えながら無言であった。どういうわけだったのか、それを思い出すごとに考えてみるのだが、馬座にはいまもって解釈のつかないままである。

ヒラリヤでもう駄目だろうと医者から宣告をうけると、ジンのとき同様玄関に座布団を敷いてその上においてやった。馬座の家は玄関が板敷きだから、すこしでも温かくしてやるという気持ちと、優遇されているという意識を持たしてやりたいからであった。ジンもそうであったが、家のなかで生活をさせると、先ずその上に乗ろうとするのは馬座の使っている座布団であった。客があつてその客が帰るとき馬座が玄関まで送って出ると、そのあと素早く占めるのが馬座の席であ

った。ほかにいくら座布団があっても、そっちへは行かなかった。そして馬座がもどって来て、

「さあ、どいたどいた。」

と、足でそういう動作をすると、しぶしぶ怨めしげに彼の顔を見上げながら座布団を下りて別の座布団の上へ行く。明らかに、その席が身分のいいこととされているかのごとくであった。

その晩おそい晩飯をすましてからもうひと仕事するため二階上がる途中、玄関のマヤの前を通りかかると、座布団の上にもろく寝ていたマヤは薄目をあけて、小さく尻尾を振った。

「マヤ、どうした？元氣ないのか。」

しゃがんで頭を撫でてやると、マヤは力なく立ち上がって馬座に力のない姿勢でとびついて来た。その拍子にその口が馬座の口にふれ、接吻したことになった。それは瞬間の触れ合いで、偶然だったかも知れない。マヤはその晩死んだが、ずっとあとになってその話をする、妻は妙な顔をした。

「厭あね、もしかしたらヒラリヤうつったかも知れないじゃなくて。」

まさか焼き餅やいたのではあるまいが、すぐその出来事を伝えなかったのを非難している語気であった。

ジンもマヤも庭の桜の木の根本に埋めてやったが、桜は毎年花をつけて今や大木になった。二代目マヤも同じ場所に埋めてやったが、かの女が一番長生きをしたくせにあまり幸運とはいえない生涯であった。二代目マヤは、二代目を名乗る通り牝犬で、一度子供をうむとすぐ妊娠予防手術を施されてしまったからである。しかし、そういう話になれば、ジンも初代マヤもあまり恵まれていたとはいえないが、それでも二匹のあいだにできた子孫たちはこの海岸町にまだ幾匹か生き残っていると聞いている。

その二代目マヤはスピッツで、——いや、その前にジンにまつわるエピソードを紹介しておきたい。ジンが来たころ、ということは馬座の家ができあがって住みはじめたころのことだが、しきりに訪ねて来る青年がいた。やはりこの海岸町に住んでいる叔父の家に寄宿しているとかで、就職口を探しながら療養しているといっていた。

道を歩いているとき不意に話しかけて来て知合いになったのだが、若干虚名みたいなものを持っている馬座としては珍しいことではなく、その竹野田という青年は病気のため卒業が遅れたと云い、そのころは高校受験の生徒たちに教えてい

るだけだったから時間を持てあましたみたいに訪ねて来るようになったのである。馬座の家の空気が親しみやすかったためか、竹野田は次第に喰いこんで来、馬座の方でも便利だから書生でもおいたつもりで、雑用をたのんだりした。そのころはまだ電話がなかなか付かない時期だったので、雑用も多かった。妙に器用なところもあり、馬座は便利に思ったが、反面ちよいと抜けているところもあってそれも愛嬌のひとつであった。

こんなことがあった。建築屋が建てっぱなしにして行った物置小屋にペンキを塗ったらどうかと云い出した竹野田が、自分でペンキを買いに行つて、馬座の妻や女中を助手にして塗りはじめたのはよかったが、全部塗り終るころペンキが足りないことを発見したのである。それも一番よく見える部分に塗れないことがわかると、彼はふてぶてしく開き直った。

「ここだけ塗らないでよくと、かえって印象的じゃないですか。」

馬座は笑つて彼の云い分をみとめたが、一間四方の物置小屋のひとつの壁の裾の一部分が白木のままで残っているのは、たしかに醜く印象的であつた。

そのころになると、竹野田は一日に二度も三度もやつて来るようになり、馬座夫婦のおそい朝飯にぶつかりと一緒に食卓に向かい、コーヒーなどうまそうに飲んだりしたが、ある朝のことだ。目がさめたばかりの馬座たちが寝室の雨戸を明け、五月の気持ちのいい風を入れているところを庭を通りかかったのである。そんなに毎日遊びに来るようになっても玄関のベルを鳴らす習慣を守っていた竹野田としては稀有のことで、そのとき彼がどんな心境にあつたかはついに訊きだす機会がなかった。もともと、門からはいつて来れば庭への木戸は簡単にあけることができる。ジンとも仲よくなつていったから、先ず犬に挨拶をするつもりだったのかも知れない。通りすぎるときひよいと覗きこんだのは、たまたま雨戸が明いていたからであろう。が、寢床に起き直っていた妻に見つかったのが、不運といえど不運であつた。

「竹ちゃん。(馬座の家では夫婦ともこの愛称で彼を呼ぶようになっていたから、ジンが来た翌年のことだろう) ひとの寢床を覗くなんて失礼よ。」

その声に教えられて仰向きになつて新聞をひろげていた馬座が目を見ると、ぱったり竹野田と視線が合った。竹野田はすぐ目をそらしたが、その目の色がにごっているのをみとめて、馬座は五月の朝の爽やかな目覚めの気分をそこなわれてしまった。寢ているところを覗いたのを叱りつけた妻の云い分には同感もしたが、その語気のはげしさには少々行きすぎもあるという気持ちであつた。竹野田

はその叱責の声に対しては答えることなく通りすぎ、やがて女中と話す彼の声がホールから漏れて来た。

その年の秋、竹野田は郷里の石川県の生家へ帰った。彼の寄宿していた叔父が一家を挙げて外国へ赴任して行くことになり、竹野田は思わしい勤め口が獲得できなかったからである。郷里へ帰った彼はその後町の高校の教壇に立つようになったと知らせて来たが、勤め口がきまったためか、追いかけて結婚をしたという報告があった。

新婚の妻をつれて訪ねて来たのはその夏で、東京でひらかれた講習会に出るのを利用しての新婚旅行ということであった。馬座の家では、親戚の若い連中や後輩の新婚夫婦が挨拶にくると、鶏の丸焼きをつくって呈するのを習慣にしている。

そのときも同じ方法で竹野田夫婦をもてなしたが、その席での竹野田の態度が馬座の眉をひそめさせた。鶏の丸焼きにナイフを入れるのを花婿の役割にするのは、その巧拙が話の種になり、新夫婦の交情に役立つであろうというのが、馬座の意図である。

ところが、そのときの竹野田の態度はひどく粗暴であった。

「おい、喰えよ。」

切りとった肉片を妻の皿に入れてやるのに、まるで投げこむといった手つきを示した。新婚をテレているなど微笑するには粗暴にすぎるその態度を、あるいは新妻に対して馬座への隔たりのないことを誇示するためかとも考えてみた馬座であったが、納得のいかない気持ちは噛みきれないまま残った。

その割きれない心持に解決を与えたのは翌年の夏やはり講習会出席のため、こんどはひとりで上京したときの竹野田の来訪が事情を明らかにしたからである。

その日馬座は所用があつて横浜へ出かけていたが、あまりの暑さのため用事を途中で打ち切って海岸町の家へ帰って来ると、ホールで妻と竹野田とが奇妙な表情でにらみ合っているのを見なければならなかった。

「どうしたんだい？」

声をかけたが、ふたりともだまったまま頬の線を崩そうともしなかった。馬座が洋服を脱ぐと、着替えのアロハを持って来た妻の動きもぎこちなかった。

「どういうことがあつたか知らないが、ふたりとも黙っているのは不愉快だね。説明したくないのなら、竹野田君は出直してくれたまえ。」

「失礼しました。それならば、告白します。僕は以前から奥さんが好きでした。今日は馬座さんがお留守だったので、打ちあける機会だと思いました。しかし、

奥さんはバカなことをいうなと取り合って下さいませんでした。そこへ馬座さんが帰って来られたんです。」

「それだけかね？」

「ハイ、それだけです。」

「そうか。じゃ、君は退散してくれたまえ。」

「ハッ、失礼しました。じゃ、これで。」

竹野田は奇妙な薄ら笑いをうかべてホールから出て行っただが、玄関に送りに出て行く妻を馬座はとめた。

「見送りなんかする必要はないだろう。」

「ハイ。」

妻がどういう気持ちで玄関へ出ようとしたのか、習慣的儀礼のためかどうだったのか、馬座に引きとめられて素直に従ったのは彼の語気のはげしさのためだったかも知れないと馬座は思った。

馬座は妻を訊問しなければならない自分の立場をかんじたが、それを夜まで延ばしたのは、どういうふうに訊くべきかその方法をみつけるためであった。竹野田が妻を好きだったことは前から知っていた馬座だったが、それを許すというか黙認したみたいな態度を取ったのは、彼自身の経験と照合してのことであった。

彼も青年のころ年上の女性にあこがれた思い出が残っている。そして、そのあこがれが彼の青春時代を美しくすごさせた経験を竹野田の場合におきかえて、それが寛容な許容の母胎になったのであったが、今日の竹野田は馬座の心持からはみ出す部分を持っていた。

夜になって訊問をはじめるとき、その前に馬座は釘を差した。

「どんなことでもかまわない、正直に話してもらいたい。嘘やごまかしはいけないよ。嘘やごまかしはすぐわかるのだ。僕は君の話の内容よりも、嘘やごまかしの方に腹を立てる。それは君にもわかっているだろう。」

しかし、鷹揚な態度ではじめたことを馬座はたちまち後悔しなければならなかった。そういえば、とすぐ胸に蘇ったのは、あの五月の朝寝室の前を通りすぎたときの竹野田のにごった目とそれを咎めた妻のはげしすぎる叱責の声であった。すると、その記憶はさらにもうひとつの情景を誘い出した。新婚の妻をつれて来た日鶏の丸焼きを切って新妻の皿に移して やったときの粗暴にすぎる言葉つきと態度とである。

妻の告白によれば、竹野田の愛情の訴えは今日がはじめてでなく、彼がまだこ

の海岸町の住人で毎日出入りしていたころからはじまっていたことになる。しかし、何ほどのことも起こらなかった、——とかの女は声をはげましたので、馬座は信じる気持ちになったが、今挙げたふたつの出来事を思いうかべると、待てよと疑いが胸に渦巻くのである。

前の場合は明らかに成心あつての覗き見であつた。あの目のにごった色がその証拠である。竹野田が求めたのは、肉体的な欲望だったのであろう。とすれば妻が拒んだのも当然とうけとつていい。馬座は自分の過去の思い出を大切に扱うことで、竹野田の場合も同じようにうけとつて許容した自分を自嘲せずにはいられなかった。そのころ女を知らなかった十代の馬座と三十歳近かつた竹野田とを同じに扱っては、竹野田の方が役不足であらう。

あとの場合は、彼はきっと新妻をつれて来たことの失敗を悟つての言動にちがひなかった。来る前には新妻の存在を誇示したい甘い心持に支配されていたばかりでなく、愛情の訴えを拒んだ相手に見せつけようとしたのに、それが予期した反応をあらわさなかったという失敗に若干やけになったあらわれかも知れなかった。

しかし、このふたつの場合いずれも竹野田と妻のあいだになんらかの事情がまわっていたことはたしかである。なんと弁解してもそこまで見とおせなかったのは不覚であつた。——馬座は自分の無関心を恥じた。そして、今日竹野田をあんまり容易に解放してやったことを後悔した。もっと詰問してやらなければならない自分の立場であつた。——今日のはじめて愛情を告白したというすぐばれるであろう嘘を、さももっともらしく口にして平然としていたのはどういう神経であらうか。そして嘘はそれだけではなかった。馬座の妻はそれを拒否したといったが、拒否したのは肉体への要求であつた。

「奥さんがいるのに何いうのよ。」

そういつてその要求をしりぞけたと妻は説明したが、馬座はその言葉にかぎり実感をもって聞いた。そしてここに到つて竹野田の墮落した心持を片カナを読むみたいに理解することができ、はじめて怒りがこみあげて来るのを防げなかった。

墮落した心持とは、結婚生活が教えたであろう女性への、女性の肉体へのイージイな解釈を指すのであつて、これは馬座自身の実感を基礎においてのことである。

以前竹野田がどんな言葉で云い寄つたかは知るべくもないが、その時期の彼のせつぱつまった欲望には同情できる馬座だが、結婚生活をつづけて来た現在、そ

れによって会得したであろう知識によってそのような態度に出た竹野田は許すことができなかった。

馬座は石川県の竹野田に手紙を書いた。

——先日君は嘘をついたね。しかし、わかりきった嘘だから、それは許そう。ただ、これだけはアドバイスとして胸にとめてもらおう。女を軽く見、そういうふうに扱ってはいけないよ

返事をもらうつもりはなかったのに、折返して竹野田から手紙が来た。

——おっしゃる通り私は嘘をつきました。

事実を口にする勇気がなかったのです。奥さまがどういうふうにおっしゃったか知りませんが、私はたしかに暴力で奥さまにおそいかかりました。しかし、それはジンのために不成功に終わったのです。私が奥さまを組み敷いているところへジンがあらわれ、私をじいっと見ていたのです。それで私の力は抜けました。そこへあなたが帰って来られたので、奇妙に思われると考えあのように取りつくろったのです。

この返事を読んだ馬座は、竹野田のぬけぬけとした顔を思いうかべた。彼のそういう表情にはしばしばふれている馬座だが、一例をあげれば、妻や女中を助手にして物置小屋にペンキを塗ったときの顔だ。

「ここだけ塗らないでくと、かえって印象的じゃないですか。」

あれは足りなくなったペンキを買いに行くのを厭がっての心持を上手にごまかしたものと、馬座は笑ってみとめたのであったが。

馬座は竹野田の手紙を妻に見せ、あの日のジンの行動を訊いた。

「ええ、あたし、ジンに助けてもらったと思っているわ。」

妻があっさりみとめたのは、もう事が終わったと考えている証拠にちがいがなかった。もっと真相を知りたい、知らねばならぬ。突っつけばいくらでも彼の知らない事実が顔を出して来そうだったが、馬座はここでひらりと体をかわすことにした。

「そうか。じゃ、何か御馳走してやるんだね、褒美に。」

ジンは鎖につながれて、マヤのと並んでいる小屋のなかに寝そべっていた。馬

座がジンがしゃべれるなら見た事実を聞きたいと思ったのは、このときであった。

二代目マヤが来たのが先代マヤの死んだ翌年だったことはたびたび書いた通りだが、ジン初代マヤの場合はくれたひとに菓子か何かを届けたのちがって、はじめから値段がついていた。金を出して買うにはすこし中途半端な犬だったが、元日生まれという条件に乗ることにしたのである。ほんとかどうか馬座は信じたとは云いきれないが。

二代目マヤがいるあいだに、馬座が脳溢血で倒れたことは、マヤと直接関係のない話だが、八ヶ月の病院生活から帰って来たときの馬座を不思議なものを見るような目つきで眺め容易に近よりもしなかったかの女に奇妙な印象を残している馬座である。その日馬座は、横浜戸塚の病院からさらに転院した伊豆の温泉病院を退院して、三時間余を自動車に揺られて来たのであった。その馬座を不思議そうな目つきで眺めたマヤは、以前とちがってとびつきもしなかった。そのときのかの女の心理を馬座は今もって解釈しきれないでいる。

そのときは杖をついてではあるが、誰にも助けられずに門から玄関まで歩いていたのである。マヤと声をかけたのに対して尻尾はうごかしたが近ようともしなかった。そんなにもちがう印象を与えたのは、彼を病人とみとめてのためであろうか、とは思ったものの、どこがどんなふうがちがって見えるのかはわからなかった。長い期間顔を合わせなかったのは事実だが、彼を忘れているのではなく、不思議というよりは不気味な心持で警戒しているかのごとき空気を漂わせているのに、馬座は逆に彼の方こそ薄気味わるいものを感じないわけに行かなかった。戸塚の病院時代に妻は幾度か家に帰るかの女と顔を合わせているにはちがいないが、伊豆の病院へついて行ってからは一度も家へ帰っていない。相当長いあいだ顔を合わせていないことでは馬座とあまりちがわないのだが、妻に対するマヤの態度は久しぶりで逢う主人に対する歓迎ぶりを全身で表現しているのである。

それは夏の終りのころで、家の留守を守っていてくれたひとに対するマヤの親愛ぶりにくらべて、馬座としては不満であった。しかし、馬座はあせってはいけなと自分にいって聞かせた。今、夏の終りだが、いつごろになったらマヤから同じ扱いをうけるようになるか、かの女の態度をからだの回復のバロメータアにしてやろう、そう思いきめるとかの女の警戒するかのごときそぶりがおもしろいものに変化した。

ジンは首環抜けの名手だったが、二代目マヤは松の木から松の木へ張ってある針金を切ることに巧みであった。牝のスピッツだから、体力がすぐれているわけ

ではないが、どうやるのか現場は見せたことがないけれどもいつの間にか鎖を引きずって脱出するのであった。その点ジンは首環なしのまま帰って来るのに反し（はじめ一度だけ彼も失敗したが）近所の松林やにせあかしあの林から助けを求めて鳴き声を立てるのが癖になった。どういう経過で引きずっている鎖が木の幹に引っかかるのか、脱出してから相当時間が経ってのことだから、その経過を知ることにはできないが、針金を切ることはできても首環抜けの方はとうとうおぼえずじまいであった。

死ぬ直前にくちびるを許したからひいきにするわけではないが、初代マヤはほかの二匹とちがってそういう面倒は起さなかった。その代り、妙に臆病なところがあって、庭に出現する蛇を見るとすくんでしまい尻尾を後足のあいだに丸めこみ、ウンともスンともいえなかった。ジンも吠え立てたが、二代目マヤにいたってはむしろ狂気といっていいほどキャンキャン吠えたものである。

今まで一度も登場しなかった蛇の出現を奇異にかんじる向きに説明を加えるならば、馬座の家は松林にかこまれていて、近年大ざっぱにかぞえてみても十数軒の家が近所に建ったのであるが、はじめのころは家などまるで視野にはいらない地形に存在していた。最初の年にとりの沼から馬座の家の庭を横切って裏の家の池へ移って行く姿を見せ、それ以来毎年一度や二度はあらわれるようになったが、次第に狎れて来た感じで庭の藤棚に脱殻をぶら下げるくらいになった。この蛇の履歴もおもしろいのだが、たびたび随筆などで紹介したし、この物語は家犬が主人公だから割愛しなければならない。ただ二代目マヤとかかわりのある部分を紹介するだけにとめよう。

毎夏藤棚にのぼり脱殻をぶら下げたりした馴染みの蛇が前年あらわれなかったのを機会に馬座の家ではホールの前の藤棚を取り払うことにした。家が建てこんで来たから蛇のあらわれる期待がうすれると同時に、藤の花房も短かく花のつけ方もすくなくなったのが理由になったのである。藤棚はその下に敷いたコンクリートの床と同じ八畳の大きさで家を建てたとき植えた藤は一時みごとな花房を垂れたものであった。しかし、不要と思えばとたんに花の色も褪せて見えて来る。前年のその花の色を思いうかべながら藤棚をとりはらってみると、高い松の枝にさえぎられるものの空がひろくひろがって来て、馬座の胸もひろくなった。

マヤとしても今まで走りまわる範囲の上を蔽っていた藤がなくなったことで、ときどき空を見上げる癖がついた。ところが、蛇があらわれなくなったと思ったのは早合点で、ある午前マヤの気持ちがいいじみた吠え方にうながされてホールから

庭を眺めると、二メートルもある青大将がつつじの枝をわたって松の木の太い幹にのぼりはじめたところであった。それへ向かって吠え立てていたのである。松の太い幹にまつわりついた蛇は、藤棚のあったあたりの高さまでのぼると、不審そうに鎌首を持ち上げていたが、やがて廂にとび移った。藤棚の代りを求め得たのであろう。そして、廂を伝ってやがて屋根瓦の蔭へするすとはいりこんだ。馬座は妻を呼び大分前から一緒にその様子を眺めていたが、蛇の姿がまったく屋根瓦の下にかくれると、椅子に腰を下ろした。

「どうするつもりだろうな、あいつ。」

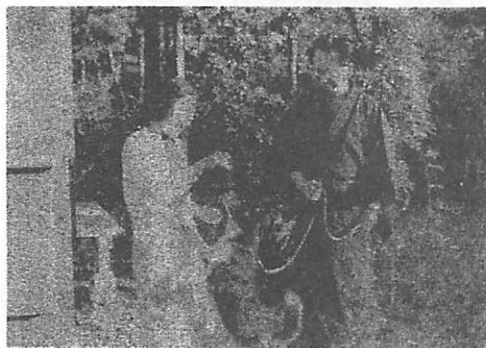
妻は気味わるそうにしばらく黙っていた。

やがて、溜息をついて口をひらいた。

「あの部屋、気持わるいわね。蛇、落ちて来やしないかしら。」

「まさかね。天井のもうひとつ上だろうよ、はいりこんだのは。」

その間中、マヤは狂気じみた吠え方と低いうなり声とを、交互に立てていた。姿は見えず屋根の廂の上に行ってしまったも、マヤには蛇の存在をかんじる能力がそなわっているのであろうか。すくなくとも、人間は見えなくなると同時に戦慄さうすれて来るのに、犬の感覚はもっと原始的にかんじることができるのであろうか。馬座はホールの椅子に腰かけたまま、しばらくのあいだ、人間のひとりよがりについて考えていた。しかし、そのころからマヤはヒラリヤミみたいな症状に苦しめられることになり、初冬のころ前述のように永遠の眠りについたのである。その後、マヤによく似た鳴き声を馬座は聴くことがあった。もちろん空耳で、神経性難聴の馬座だから、そんなふうに聞えるにちがいない。病院から解放されて二年半になった馬座は、マヤとはいくらか親しみは取りもどした程度だったのを、マヤに対しまた自分自身に対しても割りきれない心持を残しているころである。



←
「ジン」と
今井夫妻

→
「二代目
マヤ」と
今井達夫



「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成23年10月～平成24年3月) 総務担当

運営委員会 9月27日(火) 10名出席

平成23年10月例会 10月11日(火) 10時～12時 22名出席

進行役佐藤弘会員

議題1 会誌『鵠沼』103号配付について ー出席者に席上配付した。欠席者には従来通り別途配付とした。

議題2 公民館まつりの展示について ー今回のテーマ『鵠沼と馬込文士村』の展示内容および準備作業スケジュールの紹介と、協力者を募った。

お話ー『藤沢の樹木について』小林政夫会員からお話していただいた。内容は本誌の記事を参照願います。

フリートークー新しい試みとして、できるだけ多くの会員の方々に語って頂く機会を設けた。『久久比奴未(くぐいぬま)』について語り合った。

運営委員会 10月18日(火) 11名出席

今井達夫原稿類大田区馬込郷土博物館へ寄贈

故今井達夫のクニ夫人から、保管および処理について一任されていた原稿類の馬込関係分を、大田区馬込郷土博物館に寄贈した。10月18日(火)有田会長、岡田会員、竹内会員が出向き、博物館側は館長、図書館長、学芸員および、ガイド2名の方も出席されて寄贈式を行なった。

平成23年11月例会 11月8日(火) 10時～12時 22名出席

進行役佐藤和子会員

議題1 公民館まつりの報告 ー10月29日、30日に行なわれた。当会の『鵠沼と馬込文士村』展示について会員の方々から感想を頂いた。

議題2 その他 ー総合ミュージアム実現に向けての活動の一環『藤沢街中アート』への当会の協力に対し、熊坂会員よりお礼の報告があった。

お話ー郷土資料展示室で展示中の『鵠沼と劉生』のパネルを、当会の会員の説明を受けながら閲覧した。

運営委員会 11月29日(火) 9名出席

平成23年12月例会 12月13日(火) 10時～12時 21名出席

進行役竹内会員

議題1 新年会について —概要が紹介された。

議題2 『藤沢の巨樹巡り』について —説明後、事前下見の協力者を募った。

議題3 会誌104号について —掲載予定項目紹介ならびに、広く会員からの投稿を働きかけた。

議題4 その他 —馬込郷土博物館への原稿の寄贈式を行なったことを、故今井達夫のクニ夫人に面会し伝えたこと、『鶴沼と劉生』展示中の郷土資料展示室に岸田夏子さん、川戸マツさんが来訪されたことの報告があった。

お話—『今井達夫を紐解く』 今井達夫をきっかけとして入会した、土岐会員から、研究成果を熱く語って頂いた。内容は本誌の記事を参照願います。

運営委員会 12月20日(火) 9名出席

平成24年1月例会および新年会

1月18日(火) 11時30分～14時 36名出席

場所 鶴沼マリンロード(鶴沼海岸商店街)のアカレード

例会 司会進行佐藤弘会員

報告事項 — 会誌『鶴沼』104号の現在の進捗状況、『藤沢の巨樹巡り』の下見計画概要、市民講座『湘南21』からの講師依頼に対し、渡部瞭会員を紹介したことが報告された。

新年会 司会進行中島会員。有田会長挨拶、鈴木会員100歳のお祝いに花束および出席者のサイン入り誕生カードを贈呈した。続いて杉本会員の音頭により乾杯、出席会員による今年の目標、近況等披露。歓談、恒例のビンゴゲームにより和やかなムードの中、懇親を深め竹内会員の一本締めでお開きとなった。

運営委員会 1月31日(火) 10名出席

平成24年2月例会 2月14日(火) 10時～12時 20名出席

進行役岡田会員

議題1 会誌「鶴沼」104号について —進捗状況が報告された。

議題2 新年会の会計報告について —会計内容の説明がされた。

フリートーク『鶴沼の古い地名』—できるだけ多くの会員の方々が話すこ

とが出来るように、講話形式でなくフリーストーキングとした。司会は有田会長。自由闊達な場となり、当面は特に結論を出さず試行していく。

運営委員会 2月28日（火） 10名出席
平成23年3月例会 3月13日（火）10時～12時 24名出席

進行役西野賢二会員

議題1 『藤沢の巨樹めぐり』下見報告 —3月6日13ヶ所21本、事前調査した内容が報告された。

議題2 会誌「鵠沼」104号について —原稿の集結状況の報告があった。

議題3 今年度の事業計画進捗状況報告 ---下記事業計画実績概要参照。

議題4 その他 —次年度の活動テーマ募集の展開があった。

フリーストーキング『鵠沼の古い地名』前回に引き続き行なった。司会は有田会長。

平成23年度事業計画実績概要

＜史跡めぐり/見学会/展示会＞

- 1) 史跡めぐり—馬込文士村文学散歩（大森）：6月21日（火）現地散策。
- 2) 藤沢の巨樹めぐり：3月6日 8名で13箇所21本を下見。次年度継続。
- 3) 見学会—徳富蘆花旧居（逗子）：未実施
- 4) 公民館まつり：10月28, 29日『鵠沼と馬込文士村』のテーマで展示。

＜グループ調査研究＞

- 1) 時代小説家/挿絵画家 2) 鵠沼の文化人マップ 3) 鵠沼の『汐止め』という地名の所在と記念碑建立の動きについて：いずれも未実施
- 4) 関東大震災とハザードマップ：8月『東日本大震災の巨大津波について知ろう』9月『関東大震災と鵠沼海岸の現状』を例会で内藤会員より話された。
- 5) 鵠沼の古い地名の由来：2月, 3月例会で話し合われた。次年度継続。

＜継続プロジェクト＞

- 1) 今井達夫未発表作品プロジェクト：遺稿を整理し会誌『鵠沼』に順次掲載。
第103号：『鵠沼物語』、第104号：『家犬三代記』を掲載。
- 2) ホームページに内藤千代子作品を掲載：8作品—一生ひ立ちの記/冷炎/毒蛇/春雨/惜春譜/スキートホーム/エンゲージ/ホネムーンを掲載。
- 3) 楷ノ木プロジェクト：本年度は楷ノ木植樹の要望なし。

在籍会員数61名（9月以降の新規加入者無し）

（文責 佐藤 弘）

編集後記

- *「とりなくこゑす ゆめさませ みよあけわたるひんがしを そらいろはえて
おきつへに ほふねむれぬ もやのうち」明治36年、^{よろずちやうほう}万朝報が募集した
「新いろは歌」の一等当選歌です。いろは48文字、濁音1ヶ所という秀
作。春先の湘南海岸風景を詠った湘南住いの投稿者の作？と思ったら、残
念ながら作者は埼玉の人、坂本百次郎という数学の先生とのこと。
- *10月、12月例会の「お話」をそれぞれ小林会員、土岐会員に書いて頂き
ました。例会を欠席された会員は、どんな「お話」であったかがお分かり
頂けるでしょう。
- *公民館まつりの展示「鶴沼と馬込文士村」「ウオンテッド・その後」報告を
企画担当にしてみました。「馬込文士村」と「鶴沼」とのかかわりの多さ
に驚嘆、感慨深いものがあります。
- *一昨秋、藤沢市の教養講座かわせみ学園で「岸田劉生と鶴沼」が放送され
ました。それをヴィジュアルにと鶴沼郷土資料展示室と協賛で「鶴沼と岸
田劉生展」('11/10/15~'12/1/15)が開催されました。会期中に劉生の孫で
画家の岸田夏子氏や「於松」のモデル川戸マツ氏も来場されました。その
関連記事として有田、佐藤（和）両会員に、また、劉生の「鶴沼風景」が
描かれた場所の検証を渡部会員が執筆して下さいました。
- *会員が自由に気ままな事を書けるコーナー「**Coffee break**」を新設しまし
た。随想、エッセイ、短編小説、詩、短歌、俳句など、なんでも結構です。
投稿（2ページ以内）をお待ちします。
初回は鈴木三男吉会員にお話を伺いました。面白い話は他にも一杯ありま
したが、ご紹介しきれないのが残念です。
- *硯友社の江見水蔭が住んだ片瀬の住居はどこか？竹内会員がお書下さいま
した。これを機会に茅ヶ崎グループとの交流ができたのは有意義でした。
- *かつて「鶴沼」でも何度かとりあげられた首塚の碑は風化が激しく、文字
が摩耗して判読しにくい状態にあったのを、本鶴沼の林石材店が再建され
た経緯を渡部会員に書いて頂きました。
- *今井達夫遺稿、第9回目は「家犬三代記」。今井家で飼った3匹の犬の話、
主人公は「馬座」となっていて私小説風ですが、エッセイに近い。昭和20
年代後半の鶴沼松が岡の風景を想起させます。（岡田）

『鵜沼』 第104号
平成24年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸2-10-3
鵜沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>